

「巻き込まれ親父の教育」

作 藤次郎政秀

●プロローグ、模擬戦

「I Y…わたくしが出るわ、フォローヨロシク」

「はい、H Y先輩」

H Yが障害物の陰から飛び出す。途端に前方から短機関銃の銃弾が飛んでくる。I Yが短機関銃を撃っている相手に対して牽制射撃をする。

かろうじて前方の次の障害物の陰に飛び込むH Y。今度はH Yの牽制射撃でI YがH Yの居る障害物の陰に飛び込む。

それらが見渡せる櫓の上…

「…よく、こんな施設借りられましたね」

とA Mがスポーツドリンクを飲みながら訊ねると、双眼鏡を覗いてH Y達を見ているT Yが、

「…この施設は、親父のB S A Tの伝手で以前も借りた事があるけど（「巻き込まれ親父の狙撃」参照）、今回は親父がO 県領地の海軍基地に居る海兵隊の隊長さんからの口利きで、直接借りることが出来たそうよ」

「へ～え、そうなんですな」

B 県領地Y 市にあるY 海軍基地内の市街戦訓練施設…Y 海軍基地はH G 達が居る白山亭のあるY 国際港と岬一つ向こう側にある。この基地はY 国際港が外国との海上交通ならびに貿易港として開港したのと同じく帝都防衛の為の海軍基地として作られた。

訓練施設内…

H YとI Yが、対戦相手の障害物に隠れ、相手の様子を伺いながら

「…海兵隊の訓練施設は久しぶりですね」

「そうね、わたし達がたまに借りているB S A Tや正規陸軍の訓練場とはやはり違うわね」

「B S A Tの訓練施設は室内想定 of 施設で小さいですし、正規陸軍のは野戦主流の練兵場ですからね…市街戦を想定した廃屋や障害物を使つての広いスペースでの訓練場など…以外ありませんからね」

「そうね、だからB S A Tの隊員達もこの施設をたまに借りてるしね。…I Y、この障害物登れそうだから、肩かしてくれない？」

「はい」

I Yは壁に手を付き、姿勢を低くする。H Yは助走をつけてI Yの背中と肩を足場にして障害物の上に登る。

「H Y先輩…どうです？」

「バッチシ！良く見えるわ…I Yも登ってきて」

と言って、H Yは下に居るI Yに手を伸ばす。I YはH Yの手を掴むと、反動をつけて障害物の上に手を掛けて、H Yの補助で障害物の上に登った。

「ホントだ」

「じゃ、一気にたたむわよ！I Yはあの左の二人…私は右三三人…」

「はい」

H YとI Yが同時に発砲した。相手は、不意を突かれて四人被弾した…

櫓の上…

櫓で監視モニターを見ているI AがT Yに報告する。

「姐さん…、H Y先輩二人、I Y二人倒しました…残る一人逃走！」

訓練施設内…

撃ち漏らして逃げる海兵隊員を見て、H Yは

「やっぱ、一度に三人は無理か」

と、ため息をつくど、

「でも、H Y先輩あと一人ですよ。追い込みましょう…」

とI Yが励ました。H Yは気を取り直して、

「そうね…二手に分かれましょう」

「はい」

櫓の上…

「へへえ、H Y先輩達やるじゃん！I Yも…」

H YとI Yが二手に分かれて行動したのを櫓の上からそう言って、T YはH Y達の行動に感心していた。

● 訓練談義

「この度は施設を貸していただき…更にそちらの部隊の方と合同訓練をさせていただいて、誠に感謝します」

「いえいえ…O県領地のS R大尉から『Y国際港にとんでもない策士がエージェント会社構えているから、是非とも仲良くしてやってくれ』と言われまして…」

「いや…そんな…S R大尉も意地の悪い(苦笑)」

T Y達の居る櫓で、H GはY海軍基地海兵团所属のE M大尉と双眼鏡で訓練の様子を見ながら、話をしていた。

「ですので、以前我が海兵隊が使用している強化ゴム弾について、S R大尉からH G社長が入手先を知りたがっていると言う話を聞いて、伝手を得ようと教えた次第です。今まではB S A Tの訓練時にお姿をお見掛けした位ですが、今回改めて、直接お手を合わせる事が出来まして、私としましては嬉しい限りです」

「ありがとうございます。この度の合同訓練、我が社の任務上、市街地での警護任務が多いため、B S A Tや陸軍の施設ではなにか物足りないとい前から考えていまして、我が社も港の倉庫やコンテナを使用して市街戦を想定しての訓練を行っていますが、以前B S A Tの訓練に同行して使わしていただいた時に、ここの施設はより本格的な市街戦訓練施設が充実しているのを知り、以前から我が社も使わせていただきたいと考えていました。それで、以前強化ゴム弾について問い合わせた事によるご縁で、ダメもとで今度は施設を借りて我が社の訓練に使わせていただこうとご連絡したら、図らずもそちらから合同訓練の申し出があり、より実戦に近い訓練が出来るのでありがたいです」

「ハハ、お礼を言うのはこちらものです。我々海兵隊は輸送艦や揚陸艦からオカに上がり、陸軍の先駆けになって敵兵力の殲滅を行いますから、海岸、断崖、港湾都市等の他に、船舶の臨検とか敵艦への移乗戦闘等、幅広く任務を受け持ちます…今回は市街地施設訓練ですが、こちらは〃上陸途中で乗船していた上陸用舟艇が沈み、市街地で手持ちの装備のみ仮想敵と戦う〃という想定で訓練させていただいています」

「…でも、拳銃と短期機関のみで、突撃銃・ライフル・軽機関銃・擲弾筒拔きのいわば盤ゲーム（こちらの世界で言う将棋やチェスみたいなもの）で言う、馬・長弓・投石（駒の名称）拔きの状態ですが…」

と言って、H Gが苦笑いすると、

「いや…それでも、短機関銃は使わせてもらっていますし、人数もこちらは八人、そちらは二人…それでも、この様に圧倒されてしまうとは…ウチの部下達もまだまだです」

と、話をしている最中に、

「最後の一人：H Y先輩が倒しましたー！終了です！」

I Aの報告がH G達の耳に入る。それを聞いて、E M大尉は首を横に振りながら、

「やれやれ…また負けましたね。H G社長の社員達は軍の経験があるのですか？」

と訊ねた。

「…いえ、あの娘達は皆民兵会社での経験はありますが、軍の経験はありません」

「そうですか…いや、以前基地の近所にある民兵会社の方達と合同訓練で手合わせをしたのですが、武装は互角にしても、ほぼ瞬殺でこちらが圧勝してしまいましたので…」

とE M大尉が話すと、H Gは驚いて、

「ホントですか？」

と聞き返した。それに対してE M大尉は不思議そうに

「どの様な訓練をしているのか、教えていただけますでしょうか？」

とH Gに尋ねた。

「そうですね。一人海外のエージェント会社に居た者（M P）が居ますが、皆私が民兵会社時代に居た時に入社した新入社員を一から教育・訓練した者達です。でも、その訓練は私が受けた皇国政府陸軍時代の教育・訓練を元に多少アレンジしただけです…普段は警察署の道場と射撃場を借りての訓練と、先程言いました通り、港の施設を借りた市街戦を想定した訓練をして、たまにB S A Tの訓練に参加させてもらって技能の向上を図っています」

「…と言う事は、H G社長の社員達は、H G社長ご自身が民兵会社時代に教育・訓練した人達と言う事ですか？」

「はい、私が民兵会社を定年退職してY国際港にエージェント派遣会社を興したので、私に付いてきたかつての教え子達です」

「羨ましいですね…慕ってついて来てくれるとは」

「はい、ありがたいことです」

「港の施設を借りた市街戦の訓練は、銃を使用して？」

「いえいえ…銃を使用したら、水上警察署に捕まりますから、おもちゃのエアガンとかです…なので、こうして軍の施設をお借りできるのは本当にありがたい事です」

と、HGは目をつぶり、手を横に振りながら答えた。

「あつ、BSATの訓練に参加していると言うのは？以前、この施設でお見掛けした覚えがあると言いましたが…なにかあるのですか？」

「はは、お恥ずかしながら、BSAT創設時に運良く関わらせて頂くことが出来まして、その縁でBSATの施設を借りたり、訓練に参加させていただいています」

「まあ、BSATの創設に？」

「はい…BSATの隊長と言うのは、昔の民兵会社時代の部下でして…彼に創設時の教育・訓練を頼まりました（「巻き込まれ親父の狙撃」参照）」

「まあ…だからですね！実戦向きの動きが出来るは」

「ははは」

とHGは苦笑いをした。

「次々、ラストTY・IA組ー！」

TYと交代したAMが号令を掛ける。

現在の成績は、AM・MP組とHY・IY組がそれぞれ勝利。

最後のTY・IA組は、IAが腕に被弾するも、かろうじて勝利した。

●模擬戦の後

Y海軍基地内、兵舎浴室…

「いや、訓練の後の風呂はいいわね」

「そうですね姐さん」

TYの呼びかけにIAが答える。IAは三名倒したところで、相手に撃たれてリタイヤした。HYはIAを見ながら

「IA…どこ撃たれたの？」

と訊ねた。

「左腕の辺り…」

と言って、IAは自らの左腕をHYに見せた。

「赤くなってるわね」

「はい」

HYと一緒にIAの左腕を見ていたTYが

「ペイント弾とは言え、当たると痛いわよね」

と言うと、IAが

「はい、皆さんあの近距離で短機関銃乱射されて、良く当たりませんでしたね」

と不思議そうに訊ねる。そこにIYが

「さて…なんででしょう…」

と疑問を持つと、TYが威張って

「短機関銃って、弾ばらまいてるだけだし、一度引き金引くと狙いの修正がなかなか効かないから、銃口見て撃っている方向が分かれば、それを大きく避ければ当たらないよ」

と言うと、

「そういうものなんですか？」

とIYが首を傾げるので、TYは続けて

「うん、親父が言ってた。『機銃掃射は広範囲に弾をばら撒く、花壇の水やりにじょうろを

使う感じで…狙って当てるのではなく、弾幕で囲むように』って、それから『当てたきや、こまめに引き金を緩める…その理想的なのは、三発撃ったら休み、また三発撃ったら休み…突撃銃もフルオートで撃つな！せめて三点バーストに留めておけて…』、今日の人達は弾幕じゃなくて、一定方向に撃ってるから尚更…」

と言うと、H Yが

「言い得て妙」

と、合いの手を入れる。T YはI Aを指さして

「だからあんたは、弾幕の大きさを見誤ったと言う事だけよ…それだけ。でも、I Aも今日は三人仕留めたし、わたしが前進している時も的確に牽制射撃してくれたし、やれるようになったね…後ろ任せて不安なかったもの…」

と言うと、I Aは喜んで

「ハイな姐さん」

と答えた。

「ペイント弾とは言え、自分の拳銃使えるのは、港でおもちゃの拳銃で打ち合いするより、よっぽど実用に適した訓練ね」

とT Yが満足げに言うのと、

「でも…ペイント弾って後でしっかりチャンバーとバレル内掃除しないと、弾が当たらなくなっちゃうんですよね…あと、ウチで標準に使用している強化ゴム弾も…ライフリングに削られた強化ゴムがバレル内に付着する事があって、取り除くのに苦労するし…」

とI Aが反論すると、

「そうですね…この前警察署の射撃場で訓練したら、やけに弾道が曲がるので、ガンスミスに持って帰って、内視鏡で視たら、前に使った強化ゴム弾のカスだと思えますけど、チャンバー内のバレル側の奥に固着したゴム片があってビックリしました…よくジャミング（排

莢不良）起こさなかったと」

とI Yも言った。I Yの話にH Y、M Pも

「あつ、それわたしもあつた!」「ワタシモネ」

と、共感した。

海軍基地食堂…

入浴後、H G達はE M大尉と食堂に居た。

「訓練の後の風呂まで貸していただきありがとうございます。おまけに食堂まで使わせて
いただいて…すみません」

とH Gの話に、皆E M大尉に頭を下げる。

「いえ…今日の訓練は私の部下達にとっていい訓練になりましたので、今日は私のポケッ
トマネーでご馳走します」

とE M大尉が言うと、H Y達は

「「ありがとうございます」」

と喜んだ。それを見ていたH Gは（やれやれ…げんきんな息子娘共だ…）と苦笑した。

食事の後、海軍基地正門でE M大尉達に見送られた。

「今日は、完璧に負けました…また、訓練に来てください。それから今度は合同訓練もしま
しょう」

「「ありがとうございます」」

「E M大尉、今度は私の店、白山亭にいらしてください。隣の駅ですし…」

「はい、是非そうさせていただきます」

とお互い笑顔で別れた。

●E M来店

数日後：

「いらっしやいませ」

「こんにちは、可愛いウェイトレスさんだね…あら？あなた確かこの前基地に訓練に来た…」

「はい、その時はお世話になりました」

「いえいえ」

「こちらにどうぞ」

I Aに案内されてE M大尉とその部下はバーカウンター席に座る。それを見たT Tは（また新たな女…）と思って、こめかみがピクツとする。

「この前お世話になった、海軍基地の海兵隊の隊長さんがご来店しました」

とI Aが言うと、T Tは（あら、海兵隊の方なのね…）と思い、H Gに慌てて内線かける。

やがて身なりを正したH Gがバーカウンター横の従業員出入り口から入る。

「E M大尉、ご来店ありがとうございます。先日は、ありがとうございました」

とH Gが挨拶した。それを聞いてE M大尉が

「隣の駅なのに、なかなかこちらには足が向きませんね」

と苦笑しながら言うと、

「そうですね…私も海軍基地の方にはあまり行きませんね」

と笑いながら言って、H Gはメニューを出す。

「なにがお勧めですか？」

「はい、当店の自慢は白山亭オリジナルコーヒート…あと新メニューの白山亭海軍サンド

ウィッチですね」

「白山亭海軍サンドウィッチ？」

「はい、当店創業時に、そちらの海軍基地の兵隊の方が外国で食べていたサンドウィッチのレシピを持ち帰り、基地で作らせて食べていた物を除隊してから、この店で創業者の曾祖母に同じようなサンドウィッチを所望したのを再現しました」

「…じゃ私達が普段基地で食べているサンドウィッチと同じ？」

「いや、今のサンドウィッチではなく、昔のサンドウィッチになります。これは、Y海軍基地の酒保や食堂の方に資料をお借りしたり、試作も手伝っていただいて、当時のモノにより近づける事ができました。近々そちらの酒保でも販売すると聞いていますよ」

「そうですか…古き良き先輩の方々が食べていたサンドウィッチに近くしてあるのですね…では、それをいただきます。あと、白山亭オリジナルコーヒーを。EY伍長、あなたは？」

と言って、EM大尉は隣の女性に声をかけた。

「では、自分も同じモノを…」

「ありがとうございます」

やがて出された新メニュー、EM大尉はそれ見て

「おや、パンの色合いからして違いますね。具材もなんか茶色っぽいし…」

「やはり、気づかれましたか…パンも小麦粉の引き具合から当時のパンを再現しました…とは言いましても、当時のパンはパサパサで食感も悪いので、そこだけ現在のモノに近づけています。具材の調理方法も、当時と同じ調味料とか使って、この様な色合いになりました」

「そうですか…あれ？このジャムサンド少し酸っぱいですね…でも、この適度な酸味がなんとなくいい味」

「ジャムサンドだけは、昔の苺ジャムが手に入らなかったんで、当店でいくつか試作したの

ですが…いかんせん、原料の苺自体が昔と違って甘くなりすぎたので、こればかりは再現できませんでした…なので、苺をベースに何種類かの酸味のあるベリーを加えて味を近くしています…外国のジャムを使えばそれに近いものができるのですが…安定して入手が出来るかどうか考えると自前でやるより他なかったのです…他の果物のジャムを使う事も考えましたが、曾祖母のレシピを忠実に再現する事にこだわりました」

「そうですか…苦勞されたのですね」

とE Mが嬉しそうに言うと、H Gは照れて、

「はい、ちなみにこのジャムは当店オリジナルとしてレジ横でも販売していますよ」

と返事をした。隣でそのやり取りを見ていたT Tは（このサンドウィッチの元祖のY海軍基地の方に好評価を頂いたから、良かった…これからは“Y海軍様のお墨付き”とでも言うかな…）と思った。

…オイオイ、H Gの性格に毒されてるよ（笑）。作者

●実習生

「ごちそうさまでした…実は、H G社長に折り入ってお願いがありまして…」

とE M大尉が切り出したので、H Gは（嫌な予感…）と思った。

「この娘、一ヶ月間ここに置いていただけませんか？」

と、隣の女性を指差した。それを聞いたH Gは（ほら…来た！…ん？一ヶ月？）と怪訝そうな顔をした。

H Gは過去二度の娘共の弟子入りを紹介されてきたが、先日あつたばかりの海兵隊の隊長から言い出されるのは…それも、いきなり全然知らない娘を…近い人にM Pが居るが、M Pの場合は失業中に母屋に転がり込んできたので、色々（笑）知ることが出来た（「巻き込まれ親父の困惑」参照）…と思ったら、期限をつけられたので、

「一ヶ月間、ここに？なぜです？」

「実は先日の合同訓練で、こちらが大敗したので、その要因を探るべく、部隊内で反省会を行ったのですが、そちらより以前に基地の近所にある民兵会社の方達と合同訓練で手合わせをした時に武装は互角で、圧勝したのに、そちらと訓練した時にこちらはハンディーがあっても、二対八でどうして負けたのか分からないと言う事になりました…そうしたら、こちらに伺って、日々の訓練風景を見たいと言う意見が出まして…」

「それで、一ヶ月間こちらに通って、ウチの訓練に参加したいと？」

「いえ、出来れば実習生と言う事で、泊まり込みでお願いできないかと…」

「泊まり込み？」

とHGが驚いて訊ねると、EMは申し訳なさそうに、

「はい…」

と返事した。HGは困り顔で、

「まあ…ウチの連中は、私の弟子としてここに住んでますが…軍と違って生活とか習慣が違いますよ…ごらんの通り、一部はこの店で働いていますし…」

と言って、店内に居るIAやMPを見ながら言うと、

「構いません…こちらにお預けするのならば、この店でこき使って下さって結構です！この娘も、その覚悟をしています…どうかお願いします」

と言って、EM大尉と連れの女性は席を立ち、頭を下げた。

「…」

HGが黙っていると、EM大尉は隣に居る部下に

「EY伍長、挨拶しなさい！」

「先日の合同訓練ではお世話になりました！自分は海兵隊第三海兵団所属、第一大隊第三中隊第一小隊 第二分隊分隊長EYです。どうぞよろしくお願いいたします」

と言って、E Yは海軍式の敬礼をした。

「無論、タダとは申しません。この娘の必要経費はご請求してください。それにこの娘は分隊の下士官ですから、我が海兵隊のノウハウも尋ねて下さって結構です。ここは、お互いの交流と言う事も兼ねて、是非に…」

とE M大尉が席を立てて再び頭を下げた。

「うゝん」

H Gが腕組みして唸っていると、

「自分からもお願いします！」

とE Yも同じく頭を下げた。

「准尉、どうしますか？」

「んゝ、お前さんはどう思う？」

H Gの顔を心配そうに覗き込むT TにH Gが聞き返すと、

「あのゝ、話の腰を折って申し訳ありませんが…こちらの方は奥様ですか？」

と、E M大尉がT Tの方を見て言った。その途端、T Tが上機嫌になり、

「あら、ヤダゝ、なんで分かったの？…もとい！私はこの店のパートで、T Tと申します。

碇屋の参謀を勤めています。また碇屋の弟子達の相談役も兼ねてます」

と言って、T Tは胸を張った。T Tの発言に対して、（なんか、大きく出たな…まあ、大きく間違っていないが）とH Gが思っていると、

「では、T Tさんがよろしければ、この娘を一ヶ月間預かっていただけますか？」
とE M大尉が押し込んでくる。

「うゝん、どうしよう…」

それでも、H Gが迷っていると、

「いきなり来て無理を言っているのは重々承知しています。そこを…」

と、E M大尉がゴリ押しすると、

「准尉、よろしいのでは？ Y海軍基地の海兵隊さんとの伝手が強くなりますし…」

とT Tも言い出した。

「そーだな、O県領地のS R大尉にも借りがあるからなくF県領地の事件の事で…（「巻き込まれ親父の反撃」参照）」

と言いつつ、H Gが決められないでいると、E M大尉が、

「そのS Rなんですが…」

「？」

「…実は、申し上げにくいのですが、私の元夫でして…」

「「なんですと！」」

「…実は、若い頃Y海軍基地の海兵団に所属していた頃に知り合って結婚したのですが…結婚生活を重ねて行く内に性格の不一致といえますか…色々ありまして…S RがO県領地の海兵団に転属するのを機に離婚しました…あつ、いえ…離婚してもお互い今でも連絡し合っていて、今回の合同訓練を申し込んだのは、S RからH G社長のお話を伺っていたので、私自身が興味を持つての事ですので、ご安心ください」

「私はいいと思います（出たよ…准尉の年増キラー！）。ガンスミスの顧客も増えそうですし」

と言うが、T Tの目はジト目になっていた。

「やれやれ…参謀がそう言うので、お預かりします。めんどくせー」

とH Gが決めると、T Tは「あつ、出た…」と言った。

「何か？」

と、尋ねるE M大尉にH Gは

「いや…別に」

とそっぽを向いた。

●母屋・男屋案内

H Gは店内に居るI Aを呼び、E Yを手で示して、

「I A、お前もうじきI Yと交代だろ？だったら、彼女はE Yさんと言って、ここに居るE M大尉の部下だそうだ」

と言った。E Yは、I Aに対して、

「自分は海兵隊第三海兵団所属、第一大隊第三中隊第一小隊 第二分隊分隊長E Yです。どうぞよろしくお願いいたします」

と言って、海軍式の敬礼をすると、I Aはビックリして、硬直しつつも

「碇屋のI Aです。よろしく願います」

「彼女を今日から一ヶ月間ここに泊まり込みで預かるから、母屋と男屋に案内してくれるか？あと、部屋も割り当ててね」

とH Gが言うと、I Aは頷き、

「はい、了解です」

と、返事をする、バーカウンター横の通用口のドアを開け、

「I Y入りまゝす」

と言ってI Yがスカートの端を軽くつまんで会釈をして入ってくる。それに対して、

「I Y、あとヨロシク」

と言ってI AはE Yを連れて通用口から出て母屋に向かった。I Yは不思議に思っ

「…准尉、I Aの後について行った人誰ですか？」

「実習生…海兵隊からの…」

「なんですと？」

「そつ、ウチの部隊の娘よ。よろしくね…I Yさんといったかな？…あなたこの前の合同訓練でいい腕見せてくれたわね」

と、E M大尉がI Yに対してウィンクをした。

母屋…

I AがE Yを連れて母屋の玄関に入ると、

「ここが、母屋…あたし達の生活の場…一階は後で紹介するわね。まずは二階に上がって」

「はい」

I Aは二階に上がると、周り廊下を歩いて部屋を指しながら

「ここが、あたし達の部屋がある場所…ここから見て一番奥の部屋は准尉の姪御さんのH Mさんの部屋、その手前の部屋がH Mさんの同僚の看護師の方達が使う部屋よ。H Mさん達は近所の港町総合病院に勤務しているの…って言っても最近では港町警察署と港町水上警察署の女性警官達やアルバイト達も使ってるんだけど…」

「？…質問よろしいですか？」

「あつ、はい」

「〃准尉〃 って、誰ですか？ここにも階級とか存在するのですか？」

と言われ、I Aはハタと

「あつ！ごめんなさいね。〃准尉〃 って言うのは、ウチの社長の事を言うのよ…碇屋の人は皆、軍とか民兵会社時代にじゅ…じゃなかった、社長と関わりのあった人達だから自然にそう呼んでいるわ…もちろん、社長の姪御さんのH Mさんとか、外国から来たM Pとか例外もいるけどね」

「ありがとうございます」

「でね、さっきの話の続きだけど、その人達は夜勤前の待機とか夜勤明けの仮眠とか…アル

バイトの休憩とか、ただのたまり場とかで使用していて…」

「H Mさんの看護師仲間やアルバイトの人達のたまり場になるのは、わかりますが、なぜ警察官が？」

「以前、あるきっかけで仲良くなつてね…まあ、いいか…ここで寝泊まりしてればわかるわよ。で、私達准尉の弟子の部屋は、この周り廊下を行って…こちらね…手前がH Y先輩とI Yの部屋、その隣がT Y先輩とあたし、その奥がM Pの部屋」

と、I Aは廊下を歩きながら説明をして、

「あなたは、この部屋使って」

と言って、M Pの隣の部屋の襖を開ける。

「…この通り、ただの畳十畳間…棚も何もないわ」

I Aに部屋を見せられて、目が点になるE Y…

「この部屋を二人で使用しているのですか？」

「そうよ…実際私の使ってる部屋だけど見てみる？」

「はい…」

E Yは部屋に荷物を置くと、I Aの後についていき、I Aは自分の部屋の襖を開けて中を見せる。

「…こんな感じ…ちょっと狭いかな…」

衣装ボックスやカラーボックスとかで工夫して部屋を活用していた。

「…襖一枚隔てただけですか…」

「そうね…だからプライベートな事も筒抜けだし…あたしの部屋の向こうはH Mさんの同僚の看護師の方達が使う部屋だから、血なまぐさい話とか猥談なんか聞きたくなくても入ってくるわね…夜は、隣のM Pのイビキとか寝言とか…M P、D国から来たから、何言ってるか知らないけど…」

と言って、I AはH YとI Yの部屋側の襖を開ける…中には寝そべって漫画を読みながらお菓子を食べているH Yが居た…I AとE Yの姿に驚いて、慌てて座ってその後ろにそっとお菓子和漫画を隠す。それを見たI Aは（H Y先輩…バレバレです(笑)）と突っ込みを入れて苦笑した。H Yは慌てて、

「だっ、誰？I Aのお友達？」

とI Aに訊ねると、

「いえ、准尉がY海軍基地の海兵隊から預かった実習生です」

「自分は海兵隊第三海兵団所属、第一大隊第三中隊第一小隊 第二分隊分隊長E Yです。よろしくお願いします」

「H Yです…実習生？（またあの親父…）」

「はい、一ヶ月程ですがよろしくお願いします」

「はい、こちらこそ…（一ヶ月?）」

キョトンとしているH Yを他所に、

「お邪魔しました」

と言って、I Aは襖を閉めると、

「万事、こんな感じ…」

と言って、肩をすくめた。

I AはE Yを連れて布団部屋に案内して、

「お布団は、この中から一式選んで部屋に運んで…シーツ等のリネン類はこの棚から二セット持ってて…それを自分の管理で洗濯して使ってね。洗濯機は一階にあるからこれから案内するわ。トイレと洗面台はそこ…上の三階も同じ構造よ。今誰も居ないけど…え」と、

あと掃除は原則自分の部屋は自分で掃除…箒ハタキ塵取りはその棚…トイレ・洗面台・廊

下等の共通部分の掃除と布団部屋の手入れ…あつ、掃除と布団干しとかの事ね。それらは当番制…わかった？」

「はい」

「では、布団とリネンを選んだら自分の部屋に運び入れましょう！」

「はい」

EYがこれから使う部屋に布団とリネンを運び入れると、

「じゃ、次は一階ね…」

と言って、階段を下りて玄関に出る。

「玄関横にFAXと電話機があるけど、FAX以外は滅多に使用しないわ…次こっち」

と言って、IAは廊下を奥に進みながら、

「左手の部屋は家主の准尉の縄張りだから、あたし達は無断で入らないわね…姪のHMさんと従姉のKMさん…あとHY先輩はフリーパスかな…階段の下にある部屋は書斎とか書庫…ここにある本は自由に借りられるわ…」

と言って、IAは書斎の引き戸を開ける。

「この通り、いろんな本や漫画があるわ…中には如何わしい本もあるけど…あたしは『特別銃器携帯・使用許可証』の取得勉強に必要な本はここから借りて読んでいたわ…」

「特別銃器携帯・使用許可証…って、持っているのですか？」

「うん、エージェントの仕事に必要なから…二年かかったけど…」

「えー、二年で取得できたの！結構難しいんですね？」

「あたしは二年かかったけど、HY先輩を始め、TY先輩、IY…それにTTさんまで一発合格だもの…」

とIAが言うと、EYは（恐るべし…碓屋）と思った。

「ちなみに、本を借りるはいいんだけど、本を汚したり、ページの端を折ったり、書き込み

をするのは准尉が一番嫌うからやめてね」

「はい」

「えーと、つぎは…ここが食堂と居間なんだけど…食堂は食事以外にも原則自由に使って良いことになってるから、ここでお酒飲んだり、盤ゲームしたり、お喋りする他に碇屋エージェントのブリーフィングルームになっているわ。隣の居間にはテレビがあるから、これも自由に使っていいわよ…ただ、夜遅くなると隣の部屋に居る准尉に叱られるけど…」

「ここでブリーフィングですか…」

「そう…だから壁にホワイトボードがあつて、ここにスケジュールとか書き入れてるの…」

「なんかアナログですね…」

「そういう所、准尉は古臭いと言うか…でも、ネットでもスケジュール管理アプリで詳細に情報共有して…咄嗟の場合には、このホワイトボードを見るわね…あつ、そうだなあなたスマートフォン持つてる？」

「はい、持っています」

「じゃ、ここのネットの設定をするから端末ロック外してから貸して」

「はい…」

I AはE Yがスマートフォンを借りると、ネットワークの設定をした。

「これで、この母屋とお店（白山亭）と男屋では、ネットワークは使いたい放題…ただし、セキュリティソフトは自前で入れてね…そういう所、准尉はセコイんだから…」

「はは（苦笑）」

I AはE Yを連れて台所に入る。そこにはH Mが居た。

「あら、I A…お友達？」

「いえ、ちがいます。こちらは今日から准尉が預かる事になったY海軍基地の海兵隊員のE

Yさん…この方は准尉の姪御さんのHMさん」

「初めましてHMです。この近所の港町総合病院で看護師をしています。よろしくね」

「自分はY海軍基地海兵隊第三海兵団所属のEYです。一ヶ月間こちらでお世話になります。どうぞよろしく願いいたします」

「一ヶ月か…またおじさんの弟子が増えたのかと思った…」

と言つて、HMは安堵した。

「一ヶ月とは言つても、食事当番と一階の共有スペースの掃除の当番は入れますので…」

「はいはい…」

「今日は…HY先輩ですよね、食事当番は？」

「そうよ、私はこれから夜勤だから、ちよこつと食べて勤めに出るわ」

「あ、そうですか」

IAは食堂に設置してある冷蔵庫を指すと、

「ここに、三台の冷蔵庫があるでしょ。それぞれ、食堂用、准尉とHMさん用、弟子用と別れていて、食堂用には、当然食材が入っていて、それ以外の冷蔵庫には、お酒やジュース、氷菓子等が入っているのよ。特にあたし達が使う冷蔵庫は要注意ね…間違つて、他人のお酒とか開けちゃったら、それこそ弟子内で大問題になるから…」

「…はい、気を付けます！」

IA達が食堂に戻ると、

「この部屋の隣にあるのが居間よ、テレビがあるでしょ。その奥にも部屋があるけど、遺影があるけど使って構わないわ…さっきのHY先輩はなぜか近寄らないけど…じゃ、次、案内するわね」

「はい」

IAはEYを連れて廊下に出ると、奥の風呂場に向かった。

「ここがお風呂…で、手前にトイレと洗面台ね…このトイレは准尉も使うから気を付けてね。それから、洗面台横の洗濯機は准尉専用だから使っちゃ駄目よ」

「はい」

I Aは風呂場の引き戸の前で、

「ここに、フックがあるでしょ…そして、ここにかける札…このフックにこれらの札がかかっている事があるから注意してね」

と言つて、I Aは札をE Yに見せる。札にはそれぞれ『野郎入浴中（H GとS KとA M）』『清掃中』『点検中』『使用禁止』『美女入浴中…覗いたら殺す!』等書かれていた。

次にI Aは風呂場の引き戸を開けて、脱衣所に入る。それを見たE Yは（大きな風呂場…隊の兵舎並み）と驚いた。

「ここが風呂場の脱衣所…ここに数台の洗濯機と乾燥機があるから、こちらを使ってね…で、ここの棚があるけど…棚一つに名前が貼つてあるでしょ…ここに石鹸とかシャンプー等を置いておくの…後であなたの棚を決めましょ。あと脱いだ服はその脱衣籠使つてね…これには名前とかつけてないから、あがつた時間違えないようにね」

「はい」

I Aは浴槽の引き戸を開ける。

「ここが浴場…ごらの通り、二十四時間入りホーダイ!…つて、言っても掃除している時とかは入れないけどね…」

「なんで二十四時間風呂に入れるようになってるんですか？」

「うーん、それはねー、この白山亭の歴史に深く関係しているの」

「？」

「この白山亭はね、昔はミルクホール白山亭って言つてね…E Yさんミルクホールって知ってる？」

「いいえ」

「…じゃ、やめた！」

「えっ？」

「この先は、関係者以外話しちゃいけないから…」

「どうしてですか？」

「うーん、准尉が嫌がる…かな、でもお店の仕事の後とか警察の道場とかで稽古して汗をかくと直ぐに入れるから嬉しいわね」

「…」

「次は別棟の男屋を案内するわね」

「はい」

「母屋は、准尉を除いて女達が生活する場に対して母屋は男達が生活の場になっているのと、ボイラー室があって、それから今はガンスミスの工場としても運営してるの」

I AはE Yを連れて母屋を出ると、男屋に入った。

男屋ガンスミス工場…

「こんにちはー」

「よっ、I A…後ろの人は？」

「軍曹…この人はね、准尉がY海軍基地の海兵隊から預かったE Yさん」

「自分は海兵隊第三海兵団所属のE Yです。一ヶ月間実習の為、こちらでお世話になります。どうぞよろしく願いいたします」

「ふーん、H Gの奴。また弟子をとったのかと思ったが…俺はS Kと言って、H Gとここで碇屋ガンスミス部門を共同経営している」

と事務机で、書類を作成しているS Kが言うと、その奥で機械を操作していたA Mが手を止めて、

「自分は、A Mと言って、准尉の弟子の一人です。ヨロシク！」

「このお二人は、ここに住んでいるのよ」

「へー」

I Aは工場の棚を見せる。

「ここにガンラックがいくつかあるでしょ…この様にプレートが貼ってあって、お客さんから預かった銃器、碓屋の使用する銃器、准尉と軍曹の個人的趣味の銃器…」

「あー、I Aさん」

「はい？」

「ここでのH G社長の呼び名は准尉ですが、この共同経営者のS Kさんは軍曹と呼んでる件についてですが…」

「あつ、それも渾名…」

「渾名ですか？」

「H G社長は、私が民兵会社に居た頃の社長の階級。あちらに居るS Kさんは皇国政府軍退役時の階級…今はお二人とも除隊しているから、昔の階級で呼んでいるの」

「ありがとうございます」

「ガンスミスは、S KさんとA Mさんだけですか？」

「いや…碓屋エージェントは皆ガンスミス部門も手伝うわよ」

「…と言う事は、I Aさんも？」

「I Aはこの機械の扱いは一番うまいぞ！」

とS Kが口を挟む。E YはI Aを見て、（やはり、恐るべし…碓屋）と思った。

●問題児

I AがE Yを連れて母屋を案内しているのと同時刻、白山亭店内：

「ごめんなさいね、無理を言って」

と言って、E M大尉がH Gに謝る。

「…」

「実は、今回の実習の件、あの娘が言い出したのです」

「？」

「あの娘…なんかマニュアル主義というか…ルール主義と言うか…ストイックな所があつて…部隊で訓練していても、何か疑問を持つと直ぐに“これは、どういうことですか？”とか“何か決まり事があるのですか？”とか“マニュアルとかあるのですか？”とか、尋ねて来るので…ついた渾名が“ナゼナニ、どうしてちゃん”…(苦笑)」

「ウチ（碓屋）には、そんなモノありませんけど…」

H Gが怪訝そうな顔で答える。

…正しくは、B S A T立ち上げ時にH Gが作成した教育・訓練マニュアル（「巻き込まれ親父の狙撃」参照）がありますが、現時点ではH Gはそれを使用していません。作者

「はい…多分そう言うと思いました…おたくの強みは阿吽の呼吸のチームプレイと目的を決めると各自が独自で考え自己責任で動くことです…それはH G社長自身がその要になっていると私は分析しています。これは軍隊では理想的ですが、そのレベルまで行くのは難しいのと、軍隊は家族ではありませんので、それ故の馴れ合いや甘えが起こってはいけません。その為の規律・統制があるのですが、あの娘にはそれが理解できないのです」

「…そう言う事ですか…だとするとウチに体験的に入門しても理解できないでしょうな」

「それは、私も重々承知しています。私はあの娘にマニュアルが成立しない世界と自律的に

行動する事の重要性を知る一助になると思い、H G社長に無理をお願いしました…どうかこの通り…」

と言って、E M大尉は再び席から立ち上がり、頭を下げた。

「E M大尉：頭を上げて席にお座りください…分かりました。私も教育者だと思っているので、引き受けた以上、ウチのすべてを見せてあげようと思います。それで彼女が何を得られるかは分かりませんし、私も敢えて働きかけはしません。それでよろしいですか？」

「はいそれで構いません。H G社長ありがとうございます」

E M大尉が帰った後、T Tが

「准尉：あんな事言っているのですか？」

「なにがだ？」

「E Yさんでしたっけ…あの娘にマニュアルが成立しない世界と自律的に行動する事の重要性について教えるとE M大尉に言いましたが、ウチには以前B S A Tチームの編成に関わった時に准尉が作った教育・訓練マニュアルが存在してますよね」

「その事か…俺はウチのエージェント達の日常を見せるとは言ったが、ウチの息子娘達の結束力について教育するとは言っていないぞ…元々そんな事についてマニュアル化出来ないし…日常の訓練は、皆自発的にやっているの、作ったマニュアルは無視してるし、ましてやウチのマニュアルは海兵隊のマニュアルも参考にしているので、彼女には役に立たんぞ」と、H Gが真顔で言う、

「えっ？」

「どういうことですか？准尉」

バーカウンターの店側に居たI Yまで驚いて訊ねた。

「俺は、彼女が体験入門する事でウチのエージェントの日常からマニュアルが成立しない

事を見せて、また各自自律して行動する事を見せて自ら考える事は見せるが、そこから彼女が何を学ぶかについては、俺は知らない。また俺から教えない…とE M大尉に返事したんだ…E M大尉もそれでいいと言った」

「？」

H Gの話にT Tは首を傾げ、I Yは複雑な顔をして、（親父は一ヶ月ほったらかして返すつもりだ…なんかえげつないな…）と思った。

● 実習開始

I Aから一通り、案内が終わると、I AはH Gの元にE Yを連れて行き、

「准尉、案内と、部屋を決めました。彼女は、今日は何をさせたらいいのでしょうか？」

と訊ねて来たので、H Gはバーカウンターのの中から店内のシフト表を取り出し、

「I A、お前さん後一時間程したら、また店内のシフトだよな」

「はい」

「なら、二階でE Yさんの女給服を見繕って、着替えさせてくれ」

「はい、分りました」

「じゃ、あたしについて来て」

とI AはE Yを連れて白山亭の二階に上がった。

「お店の二階は、二つに分かれていて、駅側の部屋は、パーラー・ホールとして、団体客や賓客などを接客するのに使用しているの。あとは、ここでダンスホールとしても使用していて、地域のダンスクラブとかに貸し出したり、A M先輩がマナー講座としても使用しているわね。奥側は倉庫になっていて、パーラー・ホールで使用する椅子とかテーブル類をダンスホールとして使用する場合にしまう場所として、また、アルバイトの人達が着替えたりする

場所よ。あたし達弟子は、自室で着替えるけどね。なので、ここには女給服のストックがあるの。あと、三階はね、リモートワーク用にと、防音壁を備えた貸会議室や個室があるわ。それから、一応屋上と言うか、テラスがあるんだけど、一般には開放していないわね。知ってると思うけど、夏至を挟んだ一週間の最終日のY国際港開港記念日の夜は大花火大会があつて、特等席なの」

と言って、I Aは二階の物置に入り、そこにある作り付けのクローゼットを開けた。そこには、女給服が吊るされている。I AはE Yに女給服を見せて、

「サイズ違いで、左から並んでいるから、あなたのサイズに合うのを選んで頂戴」

と言った。

「はい…」

E Yは、自分のサイズの女給服を選びだすと、I Aは

「着替えを手伝うわ。次は自分で出来る様になってね…と言っても、難しいのはタイの結び方と、エプロンの紐…特に後ろで交差させるときの向きだけなんけど…」

「はい」

と言って、I Aに手伝って貰い、E Yは女給服に着替えた。

「サイズは、バッチリね…どこかキツイ所はない？」

「はい、大丈夫です」

「その姿見で、チェックして。動きづらいとかない？特にスカートが長いから、足で踏んづける事ない？あたし、最初の頃、店内でしょっちゅうスカートの裾踏んで転んでいたから…」

「大丈夫だと思います」

と言って、歩いている傍から、スカートの裾を踏んで倒れた。

「ほら、言わんこっちゃない！このスカート、お腹周りにゴムとか入っていないから、歩

いている内にその重さで下に下がるのよ。特にインナーがシルクなんで、上の綿のスカートとの摩擦が弱いから…」

と言つて、I AはE Yに手を差し伸べた。

「他の方はどうしているのですか？」

「人それぞれね…あたしは、細いサスペンダーでスカートを吊っているわね」

と言つて、着ている女給服のエプロンの肩の箇所を捲ってみせた。

「…それって」

「うん、外観を損なわなければ、いいんだって…だから、あたしはエプロンの紐の下になる様にサスペンダーをするの。他の人の例だと、T Y姐さんなんかは、インナーと上のスカートの間に滑り止めのゴムバンド入れているわね…他のアルバイトの娘達も、あたし達を参考にしたり、それなりに対応しているわ。中には、ビスチェやコルセット使つて、腰を締めてスカートが落ちないようにしているツワモノも居るわね」

「制服を改造するのは？」

「うーん、あたし達弟子はいいと思うけど…支給されてるし…でも、アルバイトの人達は、ここに吊るされているワンサイズの女給服を複数の娘で使い回したりする事が多いから、駄目じゃないかな？他に使う娘の事を考えると…」

「使い回しですか？洗濯とかは？」

「あ、ウチのシフトは非常に特殊だから…それは、お店で見れば判るわ。洗濯とかは、母屋の洗濯機で洗つて、乾燥機に入れてアイロン掛けて、ここに戻すまでが、アルバイト時間なの。だから、母屋の部屋が賑わうのよ。あ、酷い汚れの場合は、近所のクリーニング屋さんに出して、染み抜きとかするわね…もつとも、その場合、クリーニング代がアルバイト代から引かれるけど…あたし達弟子も引かれるわ…セコいんだから(怒)」

「そういう事に、なにか規則が決められているのですか？」

「規則って？」

「制服着用のマニュアルとか、規則です」

「それは、無いけど…慣習かしらね。准尉が言うには、『お客様側から見て、見苦しくなければいい』と言っているわね」

「そんな、曖昧な」

「それでも、無いわよ。お互いチェックして、与えられている範疇でそれぞれ考えて工夫して、外見が損なわなければいいのよ。みんなそれなりに楽しんで工夫してるわ。お客様目線ってヤツ？」

「…何か、違う様な気がしますけど…」

着替えたEYは早速、白山亭のアルバイト見習いとしてIAの指導の元、女給服を着て店内に居た。

「わたし碇屋エージェント達は、基本任務がない時は、交代でこの店で働いてるの」

「ウェイトレスとしてですか？」

「ウェイトレス…ここじゃ女給と言うのよ！」

「はい…どうしてですか？」

「ここの創業時はミルクホール白山亭って言って、そこで働く女の人達は女給と当時呼んでいたから…その名残」

「女給って、何ですか？」

「女給って、食事や飲み物を給仕する女性の事を『ウェイトレス』と言う言葉が、この国に定着する前に当時そう呼んでたんだって、あたしも最初女給って、給料貰って働いている女性の事かと思ってたけどね…」

「ありがとうございます」

「急に、任務とか事件とかで人が居なくなるとシフトのやりくりが大変で…それをアルバイトの女給達と上手く回しているが、あそこに居るTTさん…TTさんも准尉の教え子だけど、結婚しているの、ここでは従業員扱い。准尉があそこに居る事もあるわね」

「凄腕ですね」

「そーよ」

「あと、夜はP u b営業になるんだけど、P u bのマスターはI Iさんと言って、准尉の軍時代の後輩と聞いてるわ…後で紹介するわね。あと、ここにも准尉がマスターやつてる時があるわね」

「H G社長は結構働いていますね」

「そうね…ガンスミスの仕事もするし、お店の仕事もやるし、自警団もしているし、警察署等で射撃インストラクターとか色々してるし、あと、外回りの営業活動とか…でも、暇なときは縁側でパイプ吸っていたり、近所のR交易商公社の社長と盤ゲームしながら馬鹿話しているし…」

と、I Aがしみじみ言うと、E Yは店内で給仕しているアルバイトのM SとA Kを見ながら、

「ここで働いているアルバイトの方々は？」

「ウチのアルバイトはちよつと特殊で…」

「？」

「さつき母屋でH Mさんの看護師仲間と警察官の話をしたでしょ？」

「はい」

「その人達がここでそれぞれの勤務の空き時間や休暇の日にここでアルバイトしてるのよ…他にもあと、B S A Tや機動隊の隊員とかね…あと港灣局の人もあるわね。なので、さつきも言ったけど、二階の女給服は、同じサイズの人達で使い回してるの。そう言った人達がアルバイトに居るので、ウチの店って安全な店ってB 県領地知事から感謝状貰ったりす

るし、また学生のアルバイト希望者が募集広告出してないのに直接売り込みに来たりするんだけど…この制服目的で…でも、既にそれらの人達でアルバイトの人数は実はオーバーフロー状態になっててね…おかげで、こちらは病気や怪我の対応の仕方や、警察署の道場や射撃場とか機動隊の施設でも色々便宜とか図ってもらったりしているの」

「IAさんは、ここの仕事以外は？」

「さつき男屋に行っただでしょう？」

「はい」

「あそこの工場でガンスミスの作業してたり、あたしは碓屋の営業もしているから、外回りとかしているわ…あと、配達とかのデリバリーサービスね」

「…いつ、訓練とかしてるのですか？」

「うーん、准尉の毎朝のトレーニングに参加して、准尉から指導受けたり、仕事の合間にHY先輩とかTY姐さんやIYの稽古に付き合ったり、ガンスミスで調整した銃器の試射に射撃訓練を兼ねてたり…書斎の専門書とか読んでいて分からない点は准尉に教えて貰ったり…」

「訓練メニューはないのですか？」

「…ないわね」

「何故？」

「あたし達は軍隊じゃないので、基本自分の体力維持は自己責任で行うのよ…だから外で警護任務の多いIYやTY姐さん、AM先輩とMPなんかは、各自自分で決めた訓練メニューで鍛えているし、HY先輩は他の人達のバックアップ任務が多いから、港町署の道場で近所の子供達相手に先生として体術の稽古してるし…」

「…そんなバカな！」

「そう言われても…」

EYの質問にIAは困り顔になった。EYは更に続けて

「連携とか、戦術訓練とかしないのですか？」

「…連携？戦術…？うーん、しいて言うなら、店の定休日に港の倉庫借りておもちゃの鉄砲で撃ち合うくらいかな…あと、機動隊の施設借りてとか…」

「なんですか…それ？」

と、呆れて尋ねるEYに

「ツーマンセルって言うんだっけ？二人一組で前進・援護をする奴…その確認だと准尉は言ってるけど」

「それです…それ…マニュアルとかあるのですか？」

「准尉は、ツーマンセルは漫才のボケとツツコミの呼吸と間のタイミングが大事だと…だから、AM先輩は准尉といい漫才コンビだし、准尉とHY先輩とも上手くやれてるし…最近ではAM先輩とMPの漫才コンビが良かったりするし…」

とIAが上を見上げて言うと、EYは納得がいかず、

「そーじゃなくて」

「じゃ、なに？」

IAは困惑した表情でEYを見る。

「碇屋は、訓練マニュアルとか決められた体力維持メニューはないのですか？と聞いているんです！」

と興奮気味にIAに食って掛かる。

「ないわよ…」

と仕方なく言うIAに、

「ちょっとー、そこヒートアップしているから頭冷やしなさい、准尉は仕事中の雑談を奨励しているけど、口論はダメよー」

とバーカウンターからTTの声がした。

「はい、すみませんでした」

とIAは答えて、EYに

「ほらー、叱られたじゃないの…」

と文句を言うと、EYはヒートアップした自分に反省して、

「すみません」

と謝った。

「ここは、お店だからね…准尉は『紳士・淑女の社交場』と言っているの」

「はい、わかりました」

と言つて、EYは項垂れた。

●EY歓迎会

IAとEYは早めの夕食をとり、そのまま夜のPub営業のシフトに入った。

「昼間話した通り、白山亭は、昼は喫茶店、夜はPubの営業をしているの。これからの時間にはPub営業よ」

「そうなんですネ」

「両方の営業時間にあたし達はローテーションで女給の格好で接客するのよ」

「はい…」

EYは不服そうに返事をした。IAはEYの態度に対してお構いなしに、

「Pub営業は、昼間の喫茶営業を任されているTTさんが家に帰るので、代わりにIIさんって、マスターが入るの」

「はい」

「IIさんに紹介するわね」

と言つて、I AはE Yを連れてバーカウンターに居るI Iの所に行く。

「やあ、今日はI Aが入るのか…あれ、この娘誰？」

「あつ、I Iさん彼女はね、准尉が今日預かった海兵隊の実習生…一ヶ月間、碇屋のエージェントとして住み込みで働きます」

「そう…初めまして、夜の部のマスターのI Iと言います。私は、H G社長の皇国政府陸軍（後の正規陸軍）時代の部下になります。ここには通いで来ています。よろしく」

「E Yです、よろしく願ひいたします」

「海兵隊さんなんだ…なんでまた社長が…また酔狂な事を…」

「あたしも、そう思います…」

とI Aも不服そうに言つた。そんな折、H Gがバーカウンター横の従業員出入口から顔を出すと。

「I I」

「はい、社長」

「今日は早じまいしてくれ、そちらのE Yさんの歓迎会やるから」

「はい、わかりました」

白山亭はP u b営業の閉店時間を早めて、店内でE Yの歓迎会を始めた。

「アテンション！（傾注！）」

と言つて、H Gは咳払いすると、E Yを横に立たせて、

「あー、先日ご縁があつて、Y海軍基地の海兵隊と模擬戦を行った。その時に先方の隊長さんが弊社に興味を持たれ、交流と言う形で、彼女をここの実習生として一ヶ月間預かる事になった。では、自己紹介を…」

「先日の模擬戦では、お世話になりました…御社に完敗しました。自分は海兵隊第三海兵団

所属、第一大隊第三中隊第一小隊 第二分隊分隊長E Yです。階級は伍長です。一ヶ月間こちらでお世話になります。どうぞよろしくお願いいたします」

と言って、E Yが頭を下げると、周囲から、

「「実習生？聞いてないよー！」」

と、I A以外はヤジを飛ばす。ちなみに、H YとI Yならびに、A MとS Kは知っているのにも関わらず、わざと騒ぐ。H Gはそんなヤジを気にせず、

「ま、何分突然なので、そう言う反応はごもつとも！海兵隊さんもウチに負けたのが余程悔しくて、こちらの教育・訓練をスパイ（E Y「スパイって…」と言って、驚く）するために送り込んできたって訳だ。逆にこちらでも海兵隊の戦法について学ぶ絶好の機会だ。お互い切磋琢磨するように…それから、彼女から聞かれた事は正直に話すように…以上」とシレつと言った。

H Gの言葉の後、

「じゃ、自己紹介するわね。わたしはH Y。この中の最古参よ…准尉の二番弟子」

H Yの自己紹介にE Yは驚いて、

「えっ？こんなに若いのに？」

と、H Yの事を見た目で驚いて、聞き返すと、H Yは怒って

「そーじゃなくて、准尉と一番長い付き合いしているって事！」

と言ったが、他の息子娘達からは「「H Y姉さん…それ同じ意味だから…」」と突っ込まれていた。

「私はI Yです。准尉の一番弟子です」

「わたしは、T Y…准尉の三番弟子よ」

「あたしは…もういいよね…I Aよ、ヨロシク」

「M Pネ、准尉の四番弟子ネ」

「自分はA Mです。准尉の五番弟子です」

「S Kだ、昼間挨拶したからいいよな」

「I Iです。私もさつき挨拶したばかりですね」

「以上、この俺を入れて、ここに居るのが、碓屋の経営者と社員、それから俺の弟子…エー
ジェントになる」

とH Gが言うと、E YはH Gに対して、

「…スミマセン質問いいですか？」

「どうぞ」

「昼間、H G社長の参謀と名乗った方は？」

E Yの質問に、（参謀？T Tさんの事？…そう名乗ったの？…まあ…あの人の位置づけは
そんなとこだし…）と、昼間店内でそう言った事を知らないH Y達は思った。

「彼女は正確には白山亭の従業員だが、俺が彼女にエージェント達の相談役…というかお
姉さん役を勤めてもらっている。でも、彼女も『特別銃器携帯・使用許可証』を持つて
る、手が足りないときは手伝って貰ってる」

とH Gが答えると、E Yは驚き、

「マジッ！…（やはり、恐るべし…碓屋）」

「…ちなみに、E Yさんはいくつ？」

とH Yが尋ねると、

「二十八歳です」

とE Yが答えたので、H YはI YとI Aを指さしながら、

「そう…I YとI Aとほぼ同い年ね」

と言った、I Aは感心して、

「その歳で伍長さんなんだ…すごいわね」

「自分は十八歳で海兵隊に入隊したので」と答えた。

歓迎会が続く中、ビールを片手にTYが突然、EYに対して、

「あつ、そういえばあんた」

「はい？」

「確か、わたしとIAの組の相手じゃなかった？」

と聞かれたので、EYは少し考えてから、

「そうですね」

と返事をする、TYはIAを引っ張り、

「IA…あんたが倒した相手だよ！」

とTYが言うと、IAは驚いて、

「やだ、嘘！」

「覚えてないの？」

「はい、夢中で…」

「次は、落ち着いて、相手をよく見てね。こういう事は任務でも重要だから」

「はい…」

● 娘会議！

EYの歓迎会が終わり、母屋の食堂に娘と息子が集まった。

就寝までの団欒の時間に入る。

「じゃ、あたしはEYさんとお風呂に入ります」

「じゃ、自分も男屋に…」

「あつ、IAちよっと待って！AMも…」

とH Yが引き留めた。

「「はい」」

I AはE Yに、

「E Yさん、先に部屋に戻って、お風呂の支度してて…後から行くから」

「はい」

E Yが食堂を後にして、階段を上がる音を聞いたH Yは、

「„娘会議“を招集します！」

と言うと、その場に居た全員、

「「「はい」」」

と返事をした。

説明しよう！（作者）…娘会議とは、H Gの娘共がH Gに内緒とする会議で、大抵は、誰かが任務で抜けた母屋の掃除と食事当番のシフト、日々の献立に始まり、常連対策（葛葉組構成員、M Z、I S、T K（彼女については、T Tが発議する事が多い（笑））等々…発議者が声を掛ける事で招集される。重大な決議…例えば、共用家電の購入とか…は、娘全員の賛成が必要とか…の決まり事がある。今回は、E Yの件なので、A Mが参加。

「議題は、昼間親父が海兵隊の隊長さんから預かった、E Yさん…」

「「「異議なし！」」」

とこの場の人達は言ったが、I Aは、

「あの…H Y姉さん」

「なにI A？」

「あたし、これからそのE Yさんとお風呂に入るのですけど…」

と言うと、H Yはハタと気づいて、

「そうね、だからあなたは会議の結論が出たら、話すわ：E Yさんの監視役として、長風呂させてね」

「はい」

「じゃ、I Aは行っていいわ」

「はい」

「A Mは、男屋に戻った事にして、I A達が風呂場に行くまで隣の居間に隠れてて」

「はい、姐さん」

I AがE Yと共に食堂の前の廊下を風呂場に行くのを見計らって、

「A M：出てきていいわよ」

「はい」

H Y「じゃ『娘会議』を開きます」

H Y「まず、あの娘：親父が一月預かると言ってたけど、なんで？誰か知ってる？」

T Y「知りません」

M P「さっき、親父から聞いたネ」

I Y「私も詳しくは知りませんが、E YさんについてE M大尉さんと准尉とのやり取りは、私はI Aと店を交代した後ですの：後半のやり取りしか知りません。前半は多分I A：話の全般を知っているはT Tさんです」

それを聞いた、H Yは

H Y「しまった、I Aお風呂に行かすんじゃないかったー」

と言って、頭を抱えた。

A M「これで、一旦中止で解散ですかね」

H Y「…そうね、一旦中止！続きは、今晚…わたしの部屋。M Pは隣室のE Yさんが寝たのを確認したら合図して、それから続きをしましょう…」

M P「ハイネ」

H Y「A Mはオンラインで参加」

A M「はい」

H Y「あと、T TとK Mさんもオンラインで呼びかけないと…H Mさんは今晚夜勤だから、後でわたしから伝えるわ…では娘会議一旦中断！」

「「はい」」

●同時刻、母屋風呂

「先日の模擬戦、あたし達いい訓練になったわ。相手してくれてありがとうね」

とI Aが礼を言うと、E Yは畏まって、

「いえ…自分こそ、いい教訓になりました」

「教訓？」

「戦闘に対する思い込みに対してです。当初我々はそちらが二名で、しかも拳銃のみだったので、楽勝と思って最初から甘く見ていました…それが、完敗するとは…相手を最初から舐めて油断したのが敗因の一つと考えています」

「…そう？他にもあるの？」

「結束力と、咄嗟の判断に差がありました。今日宿舎…いや、母屋を案内して貰った時に、二人相部屋で生活されているので、日頃のコミュニケーションが密にとれていると感じました。自分達は十人部屋の兵舎で寝泊まりしていますから…先日の組み合わせも各部屋別になっていたのを確認できましたし…」

とE Yが言うのを聞いて、I Aは（そ〜なのかな…あの二人部屋の決まりごとは、元々個室

だったのが、HY姉さんが母屋の幽霊怖がって、当時隣部屋のIYと一緒に部屋にしたのが始まりと聞いたけど（「巻き込まれ親父の鎮魂」参照）…まあ、そう言われれば確かに共同生活でコミュニケーションが密になるし、襖開ければ四人部屋でHY姉さんとTY姐さん達とドローン使って遊んでもものね（「巻き込まれ親父の邂逅」参照）と思いながら、IAは、突然EYに対して、

「あ、今思い出したんだけど…」

「なんですか？」

と、驚くEYに、

「あなた達の銃、なんか弾道おかしくなかった？」

「？」

「ペイント弾って、使った銃のチャンバーやバレル内をしっかりと掃除しないと、おかしくなっちゃうのよ…ペイントが入ってる弾頭って、強化プラスチック製じゃない！ライフルリングに削られて、火薬の燃焼でそれが固着しちゃうの…それに引っかかって、次弾の弾道がずれていくのよ」

とIA言うと、EYは驚いて、

「ホントですか？」

「うん、ウチで標準的に使用している強化ゴム弾もライフルに削られた強化ゴムが火薬の燃焼で付着して取り除くのに苦労するし…IYも『警察署のシューティングレンジで訓練したら、やけに弾道が曲がるので、ガンスミスに持って帰って、内視鏡で見たら、チャンバー内のバレル側の奥に固着したゴム片があってビックリした』って、言ってたわ…」

「そうなんですね…ありがとうございます…でも、なんでそんな事知ってるんですか？」

「あたし達、皆会社のガンスミスで自分の銃の手入れしてるから」

とIAが答えると、EYは（やはり、恐るべし…碓屋）と思った。

● 娘会議続き

EYが寝た事を隣室の襖の隙から確認したMPは静かに部屋を出て、HYとIYの部屋に行く。HYとIYの部屋とTYとIAの部屋を隔てる襖を開けて娘会議の続きをする。

HYのノートPCの画面にHYが語りかける。

HY「AM：聞こえる？会議を始めるわ」

AM『はい、姐さん』

HY「KMさん、TT、夜分申し訳ないけど…」

KM『なに？』

TT『いいわよ』

HY「では、娘会議を再開します。先程の会議では昼間親父が海兵隊の隊長さんから預かったEYさんについて、話のいきさつを殆どの人が知らないので、話を聞いていたTTとIA、IYから話して貰います。その事から、わたし達がEYさんに対して、どう接すれば良いかを決めたいと思います」

KM『えっ、そうなの？聞いてないよ』

HY「あれ？IA、KMさんと共にEYさん連れてなかったの？」

IA「…スミマセンでしたー(汗)」

と、IAは頭を下げた。

KM『オイオイ！』

TT『…では、私が話すわ…』

と言って、TTは昼間の白山亭店内でのHGとEMとのやり取りの話をした。

KM『…実習生ね』

TY「そーいう、理由？」

TTの話聞いた会議の参加者はTTを除いて全員複雑な表情をした。

HY「じゃ、TTが許可したの？」

TT『そうよ』

KM『ウチの参謀のTTが許可したのなら、いくんじゃない。必要経費は向こう持ちだし…少し水増しして請求するのもアリか…』

HY「あはは…（流石、親父の従姉…汗）」

TY「では、親父の考えは放任？」

IY「私も親父の話聞く限りではそう思いました」

IA「えー、あたし聞かれるがまま、知ってる事しゃべっちゃったよー。親父もいって言うってたし」

とIAが言い訳気味に言うのと、

TT『それでいいのよ、IA』

IA・IY「??」

TT『准尉は、EYさんのマニュアル主義について、マニュアルが成立しない世界がある事をEYさん自ら悟る事が出来ればいいと思ってるの。それはEYさんが判断する事で、こちらから働きかけをしない…確かにウチにはBSATの創設に准尉が関わった時のマニュアルが存在するけど…結局、今は使ってないし…なのでそれを敢えて隠して、逆に准尉はEYさんにウチの全てを見せて、EYさんが何らかのマニュアルや評価基準を作れば、それを頂こうと思ってるみたい』

HY「相変わらず、えげつな…」

IY「そうですね、碇屋のエージェントも六人になりましたからね…次を考えると、ある程度の標準化が必要になりますね」

TY「たとえば？」

I Y 「以前、親父が皆を集めて国家公安局からの外郭団体の提携の話と、D 国のエージェント機関 D S F との提携の話した時（「巻き込まれ親父の困惑」参照）、親父がエージェントの新規採用の話をした時に、T T さんが『新しいエージェントを雇うにしても、新しく入った M P 以外は、今の様に前の会社で准尉の教育・訓練を受けたと言う共通点とお互い気心が知れた…特に准尉が認めた人材を得られるとは限らないし、また新たな人材を入れて教育・訓練しても、今のチームワークを保つことは出来ない』って言った事ですよ」

T T 『あら…私そんな格好のいい事言ったっけ？』

I Y 「…あの…T T さん。ボケはやめてください」

T T 『こつめ…ん（苦笑）』

I Y 「それに対して、親父は「今後、親父並みの知識・技能を持った人材を獲得出来たら、改めて国家公安局との提携をこちらから持ちかける…そうすれば、親父は一戦から退いて新たなエージェントの育成に専念する！もしくは私達の誰かが成長して、親父並みになれば同じく」と言いました。今回の事は、新たなエージェントを入れるためのマニュアルの改版と評価基準の洗い出しを親父が意図しているのではないのでしょうか？」

H Y 「成程！」

K M 『あり得るわね…H G なら』

H Y 「…でも、弟子を増やすと、食費とか光熱費とか食事の当番割や風呂やトイレの清掃の当番割とか色々増えますけど…」

K M 『H Y …あんた家庭的になったわね、I A の時も H G に同じ意見してたけど…本当に

H G に何もされてないのね？』

H Y 「いや、そんな…まだ…」

と言って、赤くなる H Y に、H Y 以外の全員「「え…っ！」」と言う声を上げる。

K M 『この際、食事の当番割や風呂やトイレの清掃の当番割とかは別にして、今後、新しく

増えた人の経費が問題になるわね。それこそ、食費どころか、給料が発生するかも…』

I A 「そんな…」

K M 『いつまでも、H Gの弟子と言う訳じゃなくなると言う事！みんな給料を貰って碇屋の社員として勤務する事になるかもね…いままで弟子と言う事で、母屋の家賃・食費・光熱費等はタダで給料は小遣い程度だったけど、社員になったら、経理としては、給料払う代わりに家賃と光熱費貰う事になるわね。その代わりに、危険な仕事も進んでして貰う事になるけどね』

A M 『マジッ！』

M P 「ワタシも困る」

K M 『あんた達は、ネットのやりすぎ！いくら通信し放題だからと言って、電気代は掛かるのよ！ちょっとはセーブしなさい！！』

A M・M P 「すみませ〜ん」

T T 『まあ…それは置いといて、准尉の意図が今言ったような事なので、私達はE Yさんに聞かれた事は答えるけど、こちらからあれこれ教えない事でいいじゃないの？』

K M 『今回は、それでいいんじゃない』

H Y 「そうね…他のみんなは？」

「『異議なし！』」

H Y 「じゃ、今回の娘会議はこれで終わりにします。T T、K Mさん夜中にごめんなさいね」

K M 『じゃ、おやすみー』

T T 『おやすみなさい』

A M 『みなさん、おやすみなさい』

H Y 「じゃ、みんな…明日からヨロシク…おやすみなさい」

「『おやすみなさい』」

●碇屋の順位、格闘術編

翌日、日課のHGのトレーニングがあつたが、EYは起きてなかった。

「准尉、起こさなくてよかったんですか？」

気になったIAがHGに訊ねると、

「俺は、この日課まで課す気はないぞ、皆自主的に出ているんだ…それとも、起床ラップがならないと起きられないのかな？」

「自分が起床ラップ鳴らしましょうか？」

とAMが横から口を出す。

「やめとけ！後で文句言われるかも…しらんけど」

朝食に遅れて出てきたEY、HGの毎朝のトレーニングの事を知り「なんで起こしてくれなかったんですか！」と食って掛かれたが、HGは

「自主練！出ようと出まいと自分の勝手」

と言った。

この日は、IAは店のシフトには入っておらず、スケジュールはガンスミスで預かった顧客の拳銃の試射。このため、IAは同じくシフトの空いているIYとEYを連れて港町警察署に行つて、拳銃の試射と道場を借りての訓練をする事にした。

港町警察署の受付で、IYが射撃場と道場の使用許可願い出すべく受付に行くと、受付のなじみの女性警察官KTに

「あら、IY」

「こんにちは」

「今日は、IAと道場で組手の訓練？」

「はい…あと、射撃場も使います」

「じゃ、いつもの様にここに書いてね…って、I Aの後ろに居る人は？」

と言って、K TはE Yを見た。

「あつ、Y海軍基地に居る海兵隊の方です」

とI AがE Yを紹介すると、K Tは

「あら…珍しい…」

「准尉が一ヶ月預かって実習中です」

と、I Aが答えると、K Tは射撃場と道場の使用許可願いを書いているI Yに

「?…あんたどこって…他所から人預かってるわね…以前、海外の研修生のM P預かって、結局社員にしたけど…」〔巻き込まれ親父の困惑〕参照〕

「アハハ…」

と言って、I Yは苦笑いした。K TはE Yに

「実習生と言う事は、『特別銃器携帯・使用許可証』は？一応、持っているのなら見せて、仕事なので」

と言うと、

「いや、彼女は持っていません」

とI Aが取り成す。

「あら…そうなの？エージェントって、皆持つてるからてつきり…」

と、碓屋エージェントしか知らないK Tが言うと、（そーなんだ）とE Yは思った。

用紙に記入しているI Yに対して、K Tは、

「そういえば…水上署（港町水上警察署）のM Sから聞いたんだけど、水上署の捜査官のK J君、碓屋の入門試験でH G社長に半殺しにされたそうじゃない！」

と、白山亭でアルバイト仲間の水上署のM SやA Kから聞いた事を、K Tが悪戯っぽく訊ね

た。それを聞いた、E Yは（怖ろつ）と驚く。

「アハハ！（苦笑）（実際に半殺しにしたのは、親父じゃなくてM Pなんですけど…ね「巻き込まれ親父の厄災」参照）」

と、I Yが苦笑いすると、

「I Y、いいわね、H G社長に大切にされて…まるでお父さんみたい」

とK Tにからかわれる。I Yは、

「なぜですか？」

と訊ねると、

「…だって、〃娘が欲しくば、俺を倒せ！〃的な…」

と言って、拳を造るK T、

「そうですかね…ある意味鬱陶しいと思いますが、あいつの場合は半殺しでいいです」

とI Yが冷ややかに言うのと、K Tはわざと

「K J君、可哀そ（泣）、でも〃あいつ〃呼ばわりしているってことは…もしかして、意識してるう？」

と言って、I Yをからかう。

「違います！」

と真顔で否定するI Yに対して、K Tは

「そんな事言ってる、ヒューヒュー」

と冷やかす。I YとK Tと言ひ合いになっている後ろで、E YがI Aに対して、

「すみません、I Aさん」

「なに？」

「特別銃器携帯・使用許可証って、簡単に取得できるモノですか？」

「違うわよ！あたしなんか、二度試験に落ちて、三度目に合格したのよ！二度目落ちた時に

軍曹に「右目つぶすぞ！」って言われて泣いちゃった…」

と真剣に言う、IAにEYは

「…右目？」

「あたし右利きだけど、利き目が左目なのよ…准尉がそれに気づいてくれたから、射撃の腕が向上したの。それ以前は全然ダメだったのよ。それにこれが無いとエージェントの仕事できないしね」

「そうですか…では、どうして碓屋の皆さん特別銃器携帯・使用許可証を取得出来たのですか？」

「それは…准尉が試験に対する傾向と対策についてレクチャーしてくれたのと、ガンズミズで銃器メンテナンスしてたら、銃の構造とか自然に覚えるもの…法令についても教えてくれたしね」

「傾向と対策？」

「准尉は、特別銃器携帯・使用許可証の試験官をする事があるから、試験の受け方について知ってるのよ…」

「…それって、確か特別銃器携帯・使用許可証の限定解除者しか出来ないと聞いていますか？」

「そうよ…准尉は特別銃器携帯・使用許可証の限定解除持ってるのよ…それに軍曹（SK）とIIさんも…ただ、軍曹はあの通り、足が悪いから試験官はあまりしないけど…それに、あたし以外の人達は、最近「限定解除」になったし…」

「マジッ！」

「うん…准尉とIIさんは更に上の上位免許も持っているの…なんでも、機関砲とか大砲撃つ事が出来るそうよ（SKも機関砲は撃つ事ができます。作者）」

とIAが言うと、EYは（やはり、恐るべし…碓屋…!）と再認識した。

「今日は、最初に射撃の訓練にしましょう」

と言って、IY達は射撃場に向かう。IAを見かけた捜査官の警部補がIAに声をかけた。

「あれ、IAじゃん。今日は試射かね？また何丁か撃たせてくれる？」

「はい、警部補さん。弾は自分で用意してくださいね…なければ格安でお願いしますよ」

「相変わらず…しっかりしてるね！」

IAとIYは馴染みの警官達に挨拶をかわす。

「いつも、こんな感じなのですか？」

とEYがIAに尋ねると、

「うん、警察の拳銃はリボルバー式が多いから、自動拳銃を撃ちたがるのよ」

とIAはシューティングレンジの後ろのテーブルにトランクを置きながら答えた。

「そうですか…」

「最初に、私達が撃つね…見学しててね」

「はい」

IYとIAはシューティングレンジに立つと、まずは自分の訓練としてそれぞれの持つ愛用の拳銃を使って二発連射（この撃ち方をツータップと言います）して、間を開け、また二発連射した。

後ろで見学していたEYはIAが戻ると

「今の射撃の仕方は？」

「これ？私達エージェントは、一発ずつ狙いを付けて撃つ暇がない事が多いので、二連射しろと、准尉から教えられてるの」

「？」

「わたし達の任務って、至近距離の銃撃とかあるから、一々狙って撃つ暇が無いので、無意

識に二発撃って、どちらかが当たればいいのよ…でも、牽制射撃する時は一発ずつ狙って撃つわね」

とI Aが言うと、E Yは感心して、

「海兵隊の撃ち方が異なりますね。こちらは、市街地での遭遇戦を除いて相手との距離がある程度開いているので、相手に向かって一発ずつ狙って撃ちますし、逆に牽制射撃は連射して弾をばら撒きますね」

「へえー、そうなんだ！勉強になるわ」

と感心するI Aに

「お互いにですね」

とE Yが答えた。

「じゃ、今度はお客さんから預かった拳銃の試射」

と言って、I Aはシューティングレンジの後ろのテーブルに置いたトランクの鍵を開けると

「まってました！」

と先程の警部補が近寄ってきた。I Aはトランクの中を警部補に見せて、

「ごめんなさい…警部補さん、今日は実習生が居るから…それに今日は試射する拳銃は三丁しかなくて…」

とI Aが申し訳なく言うと、警部補は、トランクの中を見て、

「む…そうか、じゃ次に期待しよう」

と言って、警部補が残念そうに言った。

「ありがとうございます。E Yさん、どれにする？」

「では、私はこの銃を…」

と一丁の拳銃を手にとった。I Aはトランクの中から、弾丸のケースを取り出すと、

「最初は、稼働のテストだから、弾倉に弾丸一発だけにしてね」

「はい」

E Yの射撃を後ろから見ているI A、E Yが撃ち終わると、E Yの撃った拳銃を受け取り、稼働箇所を動かしてガタとかスライドの滑りとか確認すると、

「次は、マガジンへフルに詰めて…その拳銃は七発入りだから」

と言つて、E Yに拳銃を渡した。

「はい」

E Yは今度マガジンに弾をフルに詰めて撃ちだした。E Yが撃ち終わると、

「I A」

「なにI Y？」

「この銃スライドが引かかってジャム（弾を撃った後の空薬莖が完全排莖されない事）してますよ…」

「どこ？見せて」

「ほら…こうなっています…これって、ここの部品劣化していませんか？」

「あら…ホントだ。新品に交換した方がいいわね」

「部品持ってきていますか？」

「うん」

「じゃ、私が取り換えますね」

I AとI Yのやり取りを見て、E Yは（日頃から、こんな事やってんだ…ガンスミスって勉強になるのね）と思った。

射撃の訓練と、客から預かった拳銃の試射を兼ねた射撃訓練を終えると、I Y達は道場に

向かった。

道場の更衣室で道着に着替えている時に、

「あら… I Yさん、それって…」

E Yが I Yの左腕の傷と右太腿の貫通銃創の跡を見て

「ああ、これですね…これは任務で至近距離から相手の銃弾を受けてしまいました（「巻き込まれ親父の子守唄」参照）。あと一発は右脇腹に当たりましたが、そこには防弾ベストを着ていたもので、そこで止まりました」

「至近距離？」

「はい、目の前ですね。手を伸ばしたら届くかもしれない距離です」

「…そんなに！（驚）」

I A達は道場に入り、柔軟体操をして、

「どうでしょうか？」

と I Yに聞くと、

「最初、I Aと E Yさんとで軽く手合わせしたらどうですか？私が審判をやりますから…それでいいですか？」

と I Yは E Yに振ると、E Yも

「はい、自分は構いません」

と答えた。I Aは E Yに

「E Yさん、あなたの流儀は？体術（こちらの世界で言う柔術のようなもの）、それとも組手（こちらの世界でいう空手のようなもの）？」

「自分は海兵隊式格闘技です」

「…あ、そうね…私、見た事がないからお手柔らかにね」

「はい」

I AとE Yが相對する。

「始め！」

E Yが繰り出す手数に、見た事がないので避けながら後ずさりするI A…それを見てI Yは（I A…適当な間合いで避けている…随分上達している）と思った。

I Aが巧みに避け続けるので業を煮やしたE Yが隙を作ると、I AがE Yの道着の襟を掴んだ。（あつ、I Aやるな…）と、I Yが思った瞬間、E Yの投げ技が決まった。それを見たI Yは

「えっ…ナニ？今の速さと投げ技…」

と驚いて

「それまで！」

と叫んで、I YはE Yに組み伏せられているI Aの元に走り寄る。E YはハッとしてI Aに、

「…ゴメンナサイ！」

と言った。E Yに組み伏せられていたI Aは心配顔で覗き込むI Yに

「なに？どうしたの？I Y」

と言うと、

「えっ？」

とE Yが驚き、I AはE Yに

「どうしたの？E Yさん」

と尋ねた。

「いえ…I Aさんが私の繰り出す手をすべて避けたので、あなたが私の襟を掴んだ瞬間、つい本気になって投げ技を繰り出しました…この投げ技は部隊の訓練で受け身を取れずに怪我をする人が多くて…でも、I Aさんが無事で良かった…」

とE Yが安堵すると、

「いきなり、投げられてビックリしちゃった…でも、受け身を取る暇はあったよ」と笑って言うI AにE Yは愕然とした。

「今度は私と…」

「是非！」

I Aの審判でI YとE Yが手合わせをする。

「始め！」

E Yの猛攻にI Yは押されるが、(M Pの格闘術に似ているわね…)と思う様になり、(M Pより背が小さいし、私と同じ位だから…)と考えて、徐々に押し返す。

その内、I YとE Yの足のローキックが同時に決まり、同時に倒れる。

「それまで！」

とI Aが言つて、I Yの所に駆け寄ると、

「どっち？E Yさんの勝ち？」

「I Yさんの勝ちでしょ？」

とお互い負けを認めていた。

「両者、相打ち！」

とI Aが言うと、二人同時に起き上がって

「凄いわね」

「そちらそ…」

と言つて、握手をした。

道場のシャワー室で

「凄いわね、あなたもIYさんも」

とEYが言うと、IAは謙遜して

「私は、いつも他の人達に勝てないので、受け身だけはしっかり出来る様にただけですよ」

「…そんな、ご謙遜を…」

港町署からの帰り支度をしている時に、IAが

「ちよつと、銃保管庫に寄つてく」

と言うので、IYが「手伝います」と言つたので、EYも付いて行くことにした。

銃保管庫で担当の係官に

「こんにちは、碓屋ガンスミスサービスです。今日はメンテナンス作業の用事がありますか？」

「おや、IA来たね。本日は…」

と言って、係官は伝票を捲る。

「これと、これと…これが今回の定期メンテナンスで、こいつが動作不良…全部で七丁…頼みます」

「毎度ありがとうございます」

と言って、IAは受け取った伝票を片手に該当する拳銃をピックアップしていく、それをIYが碓屋側の伝票をチェックして、移送専用の手提げケースに並べていく。

作業依頼された拳銃を収めたケースは嚴重にロックされ、鍵が掛けられた。

「これも、碓屋の仕事よ」

と言って、IAは大きな移送専用の手提げケースを持ち上げる。

港町署から帰り道、EYはIAとIYに対して

「そう言えば、I YさんはI Aさんと同じ年との事ですが」

「そうですよ。民兵会社時代の同期です」

とI Yが答える。I Aは（あゝ、I Yの話し方についてね…気になるモノね（「巻き込まれ親父の膠着」参照）と思った。

「じゃ、なんでI Aさんに対して敬語使うんですか？」

「…それは、子供の頃からの家庭の事情で…」

とI Yが口を濁して言うと、E Yは驚いて、

「敬語をつかう家庭だったのですか？」

「はい、私実は、貴族の家庭で育ちましたので…もつとも庶子ですが」

「なんで、貴族のお嬢様が、民兵会社に…それから、H G社長の碓屋でエージェントしてるんですか？」

とE Yが興奮して尋ねると、I Aは割って入り、

「I Yの育ちの話に立ち入るのはやめて頂戴！」

と言うと、E Yはハタと

「…まだ親しくないのに、立ち入った事を聞いてしまい、どうもすみません」

と言って、E YはI Yに謝った。

「いえ…」

と言って、I Yは暗い表情をした。

道すがら、E Yは碓屋の人達の強さの順位を尋ねた。白山亭に帰っても、そこに居る人に同じ質問をした。

その結果…

体術の強さ

H G、H Y、A M、M P、I Y、T Y、I Aの順

組手の強さ

H G、A M、M P、I Y、H Y、T Y、I A

剣術の強さ

H G、T Y、A M、I Y、H Y、I A、M P

射撃の腕前

H G、A M・I Y、M P・H Y・I A、T Y

●碓屋の順位、入門順編

E Yは碓屋の結束力について、まず碓屋に来た理由について聞いて回った。

I A「あたしは、前に居た民兵会社で事務のお局に目を付けられて、嫌になって辞めた時に自分の居た部隊の隊長の紹介で、ここに連れてこられて、入門テストを受けたけど、散々な結果になって、准尉も受け入れられない状況になったけど、私大型自動車免許とか持っているから、そこに准尉が目を付けたのと、T Y姐さんがあたしを営業として鍛えるとの条件で弟子として入れて貰ったの。その後ガンスミスでの機械操作で評価されたり、准尉があたしの利き目が左目であることに気づいてくれて射撃の腕も向上したわ…准尉とは民兵会社で新入社員時の基礎教育・訓練で教えを受けたのよ」

I Y「私は、民兵会社時代にF県領地に任務で赴いた先で、事件に巻き込まれて、たまたま旅行に来ていた准尉が、私が居た部隊…これ、准尉が元居た民兵会社です…と合流して、事件を収拾してしまったので、もっと教えを受けたいと考えて民兵会社を辞めて強引に弟子入りしました…私はI Aとは民兵会社時代の同期で新入社員時の基礎教育・訓練で准尉に教えを受けました」

TY「わたしは、民兵会社に居た時に当時の相方IYがF県領地の事件の後でいきなり民兵会社を辞めたので、その相方の私に対して風当たりが上層部から強くなったので、嫌になって辞めたわ…元々あの会社では私の能力を正當に評価してくれなかったし…で、次の仕事を探そうとダメ元でTTさんに連絡したら、TTさんが『准尉がお店開いたからどうかしら…これから私も勤めようと思っていたから…』と言ってくれたので、ついて行って准尉の弟子にして貰ったわね…准尉は民兵会社時代からわたしの能力をちゃんと評価してくれていたから…なので、わたしも准尉とは民兵会社で新入社員時の基礎教育・訓練で教えるを受けました」

AM「自分は、皆と同じ民兵会社に新入社員で入って、准尉の教育・訓練を受けたけど、民兵会社の仕事が嫌になって三年程で辞めて色々な仕事を転々として、A国に行き、そこで探偵のアシスタントをしたり、独立してボディガードをしたりしている内にA国の物価の高騰で仕事にあぶれたのと、母が亡くなったと知らせがあったので、皇国に帰ってきて次の仕事を探している最中に、偶然この店に来て准尉と再会して、自分の前歴を評価してくれた准尉にスカウトされたんだ」

MP「ワタシは、D国のエージェント機関DSFにいたネ、皇国に来て任務失敗してクビになったネ、そのとき知り合ったIYに連れられて、HGに助けて貰った…なのでHGに弟子入りした」

HY「わたしは、准尉に惚れたので押しかけて来たのよ…あつ、ごめんなさい…オバチャンの冗談よ…ジョーダン…そんなにドン引きしないで〜！わたしは、准尉が民兵会社に再

就職した翌年に新入社員として入社したのよ…その前々年に徴兵制度が廃止されたの。そこで准尉から新入社員時の基礎教育・訓練で教えを受けたのよ。その後任務で失敗してその責任を追う形で退職して、実家に帰ったの…その後、実家の隣の県領地のF県領地に買い物に行ったら、事件に巻き込まれてTTと准尉に再会してそこから逃げる算段をしている時にわたし達が居た民兵会社の部隊に出会って…そこにはIYやTYが居たのよ…で准尉が事件を解決して、IYが准尉に弟子入りすると言い出したから、一緒に准尉についてきたの」

TT「私は、准尉が以前居た会社に転職して、准尉から教育を受けたわ…結婚退職して子育てしてた時に、訳あって実家に帰る途中のF県領地で准尉に再会した途端に事件に巻き込まれて、右往左往している途中でHYに再会するわ、昔居た民兵会社の社員達と再会するわ…とすったもんだした挙句に准尉がF県領地から脱出して、私はそこで帰されました…その後、准尉がこの白山亭を再興したとの話を聞いてパートに雇ってもらおうと考えていたら、TYから『会社を辞めたので、次の仕事を探している』って、連絡が来たので、彼女を連れてここに来て雇ってもらいました」

と、皆にインタビューしていると各自初めて知った話が出てきて、各自思い出話に花が咲き、事態が収拾できなくなってしまった。

それを見たEYは（そんなに深く理解しあっているとは言えないんだ…HG社長の教育が基になっているのかな？）と考えた。

EYは皆の話を聞いて整理すると、MPを除いて、他の人はHGが居た民兵会社の元社員で皆HGの教育を受けている。MPは前の組織をクビになって、HGの元に転がり込んできた…でも、HGはその実力を評価した上で…TT以外は皆HGの弟子と言う事になっている。IAは最初実力不足でHGの弟子入りに難を示されたが、大型車両免許という特技で弟

子入りして、その後H Gの指導により実力を伸ばしている…A MとM P以外は前歴で特に評価されている訳ではないし、これと言った特技を持っていない…

「…なんだ、これ？…弟子入りの評価基準が曖昧すぎる！」

とE Yは話を纏めながら驚いた。

E Yは思い切って、H Gに弟子入りの基準について訊ねた。すると、H Gは

「俺は、弟子については、俺の流儀に合うかどうかを基に決めている…別に来るもの拒まず、去る者追わずではない…」

「では、その基準は…？」

「俺の気に入った娘かな…A Mは実力で判断したけど…」

と言った。目が点になるE YとH Gの後ろでジト目をしているH YとT T…

「H G社長は、M Pさん以外は、自ら教育をされてますね」

「そうだが」

「その教育と言うのは、どうやったのですか？」

「俺自身が皇国政府陸軍で新兵時代受けた一年間の基礎訓練の中で民兵会社の業務で要不要の教育・訓練を篩にかけ、半年で一様民兵会社の社員として使える教育・訓練プログラムを作成して、当時の顧問と相談役と社長に説明し、ブラッシュアップを図った位かな…」

「それって…」

「後に君の所属している海兵隊の教育・訓練マニュアルを見た事があるが、それに比較すると、俺の教育・訓練マニュアルは、色々不足していて、途中でマニュアルに捕捉したり、改訂したりしたが、いかんせん訓練場とかの使える施設・設備のネックがあり、かなり偏ったモノになっていたな…やはり、正規軍の訓練には敵わんよ」と言った。

…B S A Tの教育・訓練マニュアルを作成した事と、それを基にしてH Y・T Y・I Yを

訓練した事は、敢えて言ってません。作者

H Gの話からE Yは（教育・訓練期間と訓練施設の問題でもないのか…）と思った。

弟子入り順

I Y、H Y、T Y、I A？、M P、A M

年齢順

H Y、T Y、A M、I Y・I A・M P

●番外白山亭の常連

実習も数日過ぎた…依頼任務が無いので、その間、碇屋のエージェント達はと言えば、白山亭の仕事と、ガンスミスの仕事と、自警団のY国際港商店街とY国際港とその付近の警備だけ…

碇屋のエージェント達は、毎朝のトレーニングに始まり、シフトでの白山亭の女給勤務（A Mはバトラースーツ）… E YはI Aの助手として、銃のメンテナンスの御用聞きや営業活動、他に白山亭のデリバリーサービスの助手…空いてる時間に港町署の道場と射撃場での訓練、男屋の工場でガンスミス作業…

たまにI AがH Gの書籍…と、言っても戦術・戦略の本ではなく、経営スキルとか営業スキルとかプログラミング等から疑問があると、H Gに説明を受けたりするくらい…

I Aの話では、機動隊の訓練施設での訓練は、今のところ予定が無いのと、港の施設は、現在輸入品のコンテナが多くて、港湾局と税関の職員が昼夜ウロウロしているので、邪魔しないために、こちらでの訓練を中止しているとの話を聞いた。

自由時間は、I Aは部屋で専門書や漫画とか読んでいたり、スマートフォンいじったり、H YやM P相手に盤ゲームに興じたり、ドローンで遊んだり、商店街で日用品の買い物とか、

休日は茶癒庵と言うC国茶の喫茶店に行つて、お茶を飲んだり、その店員とおしゃべりしたり、Y港街ショッピングモールに行つてただ見ているだけとか…IAの話だと、以前は犬の世話とかの依頼があつたそうである。IAは犬の世話や散歩について楽しそうに話をするが、EYは（そんな事までするの？）と驚いていた。

EYから見ると、毎日訓練明け暮れ、厳しい隊律で統制された海兵隊の生活と比較して、怠惰であると感じた。

EYにとっては、手持ち無沙汰になつたので、白山亭の店内で常連のウォッチを始めた。

ファイル一…KJ（男）港町水上警察署の捜査官。昼の勤務の休憩中や夜のPub営業時間にIY目当てで来店し、IYに塩対応される。

ファイル二…店内の痴漢（男）近所の任侠集団葛葉組の構成員。女の敵としてマーク。必敵必殺！

ファイル三…IM（女）有名な人気歌手。なんでこの人が常連かと思つていたら、IYの任務でIMの警護をする事が多くて友人関係になつている。

ファイル四…MZ（女）D国大使館付のエージェント機関DSFの職員。MPの元同僚で、店内でよく口喧嘩している。来店の主目的はAM。また、エージェント機関DSFの新製品…特にインナー類を売り込みに来る。HG社長に最新の防弾インナーを買つて貰つた。

ファイル五…IS（男）皇国国家公安局員。なんでこんな人がここに来るのか知らないけど、店のコーヒーのファンだそうだ。

ファイル六…TK（女）B侯爵秘書。この方もなんでこの店に来るのか最初分らなかつたが、IYの関係者らしい…IYの事を「Yお嬢様」と呼ぶので、IYはB侯爵の身内らしい…。またHG社長目当てに来店しているので、TTさんとよくいがみ合っている。

ファイル七…BK（女）IYの妹。B侯爵秘書TKに連れられて来る。IYの事を「姉上

様」と呼んでいて、可愛い。この子も学校の長期休暇期間中にはここでアルバイトをしているとの事…最近、B侯爵秘書TKがここを訪れるこじつけで連れてきているのではないかと思う。

ファイル八…CE(女)アクション女優。IMと同じ事務所で、昨年「スペシャル連続ドラマ」で共演していた。この人も碇屋に警護の依頼をお願いする事があったそうで、TYとはバイク仲間で休暇が合うと、よくツーリングに出かけているとの事。

ファイル九…RS(女)茶癒庵の店員。なんでライバル店の店員がこの店に来るのかと思ったら、IAの友達らしい…IAも休日や空き時間に茶癒庵にいく事がある。HG社長に対しても「おじさん」と呼んでいるので、かなり親しい仲みたいだ。

● 飴パニック

R 交易商公社…

「IAは…」

と事務所の前で看板を見上げてEYはIAに尋ねた。

「この会社はね、ウチにコーヒー豆やお茶、お菓子、調味料等の食材を卸してくれる会社さ
ん、ここの社長さんは准尉の友達なの」

「そうなんですか」

IA達は、事務所のドアを開け、

「ごめんください」

と言うと、事務所の奥で伝票をチェックしていたRRが出迎えた。

「IAいらつしやい…と、後ろの娘は？」

とIAの後ろに居るEYを見て訊ねた。

「あつ、准尉が海兵隊から預かった娘…」

「初めまして、E Yです」

とE Yが頭を下げると、R Rは訝し気に、

「ふーん、H Gの奴、また娘増やす気か？」

とI Aに聞く。

「それは…分かりません…」

と言つて、I Aは苦笑いした。

「先月の納品伝票と、来月の発注伝票を持ってきました」

「はい、ありがとう。そうだ…餡あげるよ…新しく仕入れたんだ。食べた感想聞かせて」

とR Rは餡をI A達に渡す。I AとE Yは何も疑問を持たずに素直に口に入れ、

「いただきます…ナニ？これ…苦くて辛い…舌が痛い…社長！これ何かの罰ゲーム？？」

とI Aが言うと、E Yも

「ウゲッ！」

と言つて、吐き出そうとした。それを見てR Rは至って真顔で

「いやそうじゃないけど…我慢して舐め切つてね…」

と言った。二人とも、H Gの友人のR Rが自分達を騙したり、虐めるためではないと思い、我慢して舐め続けた。

「おとーさん、ただいま！」

とI Aがよく行く、茶癒庵の店員のR Sが事務所に入って来たので、E Yは驚いた。I Aに尋ねると

「Sちゃんは、この社長の娘さんよ、茶癒庵はこの会社のお店よ」とシレつと言われた。

…R SはC国の国家調査局員です。茶癒庵の店員をしているのは、彼女の上司の命令です。作者。

「おう、Sお帰り…はい飴あげる」

「…おとーさん、この飴って…C国の風邪薬じゃないの…税関でよく引つかかんなかったわね…下手すると薬事法に引っかかるんじゃないの？」

「うん、税関で『のど飴』って言ったらすんなり通った…」

とRRがシレつと言うと、RSは怒って、

「なにやってんの！」

「いや、今こっちで流感（流行性感冒）が流行ってるんで、売れると思って…」

「そ…なの？じゃ貰うけど…これ良く効くけど、苦くて舌が痺れるんだよね…」

と言って、RSは飴を口に入れると、辛そうな顔をした。RSとRRの会話を聞き、味を知っているRSが我慢して飴を口に入れて舐めているのを見て、（風邪薬なんだ）と納得して、我慢して舐め続けた。

「これ、HGの奴に持ってて…みんなの分…絶対舐め切る様に言ってくれ…それから、こいつをHGに渡してくれ」

と言って、RRは飴の入った袋とメモ리카ードをIAに渡す。

白山亭…

「ただいま帰りました。これ、R交易商公社の社長さんから預かってきました」と言って、RRから預かったメモ리카ードを渡す。

「…なに？RRの奴…普段なら母屋に持って来るのに…なんだ？ま、ありがとう」

HGは母屋に居るHYに内線電話を掛ける

「HY…」

『ゴホゴホ…はい』

「…どうした咳して」

『はい…なんだか熱があつて…』

「…わかった、寝てろ…」

『どうもすみません…』

H GはH Yとの通話を切ると、

「困ったな…T Tは子供が風邪をひいたとかで今日休みだし…I Yはまだ帰ってこないし…」

H Yが風邪を引いたのとI Yが外出から帰ってこないの、バーカウンターでコーヒを淹れられる人がおらず、困っていると、I Aがまた、

「准尉！」

「なんだ？」

「R 交易商公社の社長さんから、のど飴を貰ってきました…」

と言って、バーカウンターにR Rから貰った袋を置いた。それを見てH Gは

「のど飴？」

と聞くと、I Aは

「Sちゃんが言うには、C 国の風邪薬だそうで…良く効くそうですが、なんでも薬事法に引っかかるかもしれない代物らしいです」

「えっ？」

「あと、あちらの社長さんからの言付けですが、『絶対舐め切る様に』…と」

「ふうん、今流感が流行っているからな…いただこう…ワッ！なんだこりや…罰ゲームじゃないか…」

H Gが苦しんでいると、バーカウンター横の従業員出入り口から、K Mが顔を出して

「Gちゃん、今日はこれで上がるから…」

「K M…帰るのなら、この飴舐めて…」

「なにこれ？」

「なんでも、C国の風邪薬らしい…」

とHGが言つて、飴をKMに渡すと、KMはためらいもなく口に入れ、途端に

「…辛っら〜！、でも、この苦み…確かにC国の風邪薬ね…お母さんが良く飲んでる風邪薬の味…でも、辛い…多分、この辛みで薬の苦みを誤魔化しているのね…」

と言った。

…KMの母親一家は、かつて皇国の仕事でC国に居ました。作者

「そーなの？」

「うん…もう一個頂戴！家に帰つて、お母さんにあげるわ…でも辛い！」

と言いながら、KMは帰宅の途についた。

HGは、IAに一旦店の留守を任せて母屋のHYの部屋に行った。

「HY大丈夫か？」

「…准尉…二階は…女の園ですよ…」

と、布団で弱々しく言うHYに

「…なに言つてやがる！熱でボケたか…家主特権だ！！」

「はあ〜い」

「熱は？」

「さっき准尉から電話があつた時より、また上がりました〜」

「そうか…この飴舐めろ」

と言つて、HYに口を開けさせ、のど飴を放り込んだ。

「…えつ、なに…舌が痛い！」

と言つて、熱で味覚がおかしくなっているHYが布団の中でのたうち回る。それを見て、

「C国の風邪薬だそうだ…黙って舐め切れ！」

とHGが言うと、

「准尉、風邪ひいたくらいで、意地悪しないでください(号泣)」

「良薬…口に辛いだ！」

「…それは、良薬口に苦しですよ(泣)」

そう言って、HYは飴を舐め切ると、パタンと寝てしまった…

小一時間程して、HGのスマートフォンに内線着信通知が入る。相手はHY…

「熱が下がりましたー。准尉に貰った飴が効いたみたいですー。ありがとうございます」

との声を聞いて、HGは(効き目あるみたいだな…)と感じた。

HGは母屋の食堂にIAとEYを除く元気な息子娘達を集め、

「R交易商公社の社長RRからC国の風邪薬を貰った。みんな舐めるように」

と言って、飴を舐めていない各自に渡す。

皆素直にHGの指示に従い、疑いもせずに口に入れ途端に

「「「苦い！辛い！」」

と言って、騒ぎ出す。

「辛いだろが、風邪で寝込んだHYはこの飴舐めて熱が下がったぞ！」

と言うと、皆無言で苦悶の表情を浮かべた。

白山亭厨房…

「今、流感が流行っているので、この飴舐めてください」

と言って、HGがそこに居たSYとSHに飴を渡した。SYが口に入れると

「わっ！ニガー…それから辛い…」

と言うと、S Hはためらい

「そうなの？」

「なんか菓みたい…それを辛みが覆い隠す様な…酷い味…辛みで苦みを誤魔化している様な…なんですか？社長…罰ゲームですか！」

と言ってS Yが怒った。

「…確かに、そういう味だよな…さっき俺も舐めてたから…まだ舌に痺れが残る…」

「社長も舐めたんですか？」

「うん…でも、これC国の風邪薬と言う事だ…」

「これでは、料理ができません！子供にもあげられません！」

「そー言うと思ったが…結構効くらしい…さっき部屋で熱出していたH Yに舐めさせたら、熱が下がったそうだ…」

「…そうですか…じゃ予防の為…」

と言ってS Hも飴を口に入れる。

「…なにこれ？想像以上…」

苦悶の表情をするS H…

「仕事にならないわ…」

「そうね…暫く料理の味見が出来ないわね」

「…そうね」

「社長…悔しいけど後に来るS Mに渡しますから、一つ下さい」

「はい…（罰ゲーム大会状態になったなあ…）」

白山亭が夜のP u b営業に入る前、厨房から「嘘〜！」と言うS Hの声が聞こえたので、

H Gが慌てて厨房に行くと、

「どうした！」

「すつ、すみマセン社長…S Mが…」

とS Mを見るとS Mはキョトンとして

「どうしましたか？」

とH Gに言った。

「いや…S Hの声が店内にも聞こえたので…」

「あの…社長…」

「なんだね？」

「S Mがですね…あの飴の辛みと苦味を取る方法を見つけまして…」

「なんだって！」

「はい、苦くて辛いので、蜂蜜を口に入れたら、両方中和されました…」

「ホントか！」

「はい」

「それは、朗報だ…誰かに試してみよう…つて、息子娘達はあらかた舐めちまったし…あつ、
I Iが居た」

と言って、H Gはバーカウンターで営業の準備をしているI Iに、飴を渡して

「R Rから貰った、風邪薬だ…苦くて辛いけど、蜂蜜を口に入れるとそれが中和されるらしい
…やってみてくれ！」

「社長…そんな変なモノを…」

「まあ、いいから舐めろ！命令だ！！」

「そんな無茶な…社長の命令なら従いますが…後でどうなっても知りませんよ」

と言って、I Iは渋々飴を口に入れた。

「あつ、ああゝ苦い、そして辛い…」

「そこで、この蜂蜜…」

と言つて、S Mは蜂蜜の瓶にスプーンを入れてI Iに渡した。

「I Iさん、小さじ一杯でいいですよ」

と言われ、S Mから渡されたスプーンの蜂蜜を口に含むと、

「それじゃ…あれ？」

「どうだ？」

「今までの苦みと辛みが無くなりましたね…ただの飴を舐めてるみたいだ…」

「…そうか、良かった」

「蜂蜜には殺菌作用がありますので」

とS Mが言うと、

「ふーん、それで薬の効き目が無くなると困るな…」

とH Gが言うと、普段温厚なI Iが珍しく

「人を実験台にしないでください！」

と怒った。

A Mが店内に飛び込んできた

「准尉！大変です。軍曹が…」

「S Kがどうかしたか？」

「熱を出して咳込んでいます！」

「なに？S Kが…あまり外出しないのに、何処から風邪貰ったんだ？」

「H Y先輩だと思います」

「なんでまた？」

「午前中、工場で作業していましたから…そのとき既に咳をしていました」

「分った！すぐ行く…S Mさん」

「はい」

「ちよつと一緒に来てくれ」

「はい、任せて下さい」

H GはS Mを連れて男屋のS Kの部屋に行く。

「S K…容態は？」

「…俺はもうダメ…」

「お前も、熱でボケるな！」

「先に、誰かボケたか？」

「H Yだ！…そんな事、どうでもいい、この飴舐めろ…H Yはそれで熱が下がった」

「飴だあ？」

「C 国の風邪薬だと…R Rの所から貰って来た」

「そうか…R Rの所からか…じゃ、貰う」

「あつと、その前に…」

「？」

「S Kさん、飴を口に入れたら、この蜂蜜を小さじ一杯口に含んで下さい…苦みと辛みが無くなります」

「分った！」

と言って、S Kは飴を口に入れると、一瞬苦悶の表情をしたが、蜂蜜を含むと落ち着いた。

「…なんだこの飴…苦いのと辛いのが同時に来やがる…」

「そーなんだ、ウチの息子娘共、みんなそれで文句言ってた」

「確かに蜂蜜を口に入れると、なんでもないな…みんな可哀想に…」

「熱が下がったら、教えてくれ」

「オイオイ、俺は人体実験かよ！」

「だから、H Yはその飴で熱が下がったと言ったろ！それも蜂蜜なしで…」

「やっぱり、人体実験じゃん！」

「そーかも、しれんな」

「ヲイ！」

小一時間程して、H Gのスマートフォンに内線着信通知が入る。相手はA M…

『准尉！軍曹の熱が下がりました！』

「そうか…S Kはどうしてる？」

『〃准尉に実験動物にされたー〃と言って、ふてくされています』

「A Mお前は？」

『いまのどこ、なんともありません…あの飴、予防効果でもあるのですかね？』

「うーん、そうかもな…俺もいまのところなんでもないな」

『そうですか』

「R Rの奴に教えて、金でも取るか…」

『うわー、えげつなく』

「あんなだけ、苦い辛いと皆から文句言われたんだ、その代償はきっちり貰う」

H GがR Rにスマートフォンで蜂蜜の事を教えると、

『早く言ってくれー、ウチの家族と社員に全部舐めさしちまった…皆文句を言って…』
と逆切れされた。

「はは、そうか、ウチはまだ身内だけだ…これからアルバイトの女給にあげる」

「そーか、蜂蜜か…抱き合わせて売れば儲けが増えるな！」

「教えたんだから、いくらくれよな！」

「ヤダ！」

「ケチ！」

H GはR Rとの通話を切った後で、

「R Rの奴、流感が流行っているから直接こっちに來ないのか…」

…それでも、次の月のコーヒーの卸売り価格は通常の半額にしてくれた。

●これ碓屋の仕事か？

「…これで、流感の件はひと段落…と、次はR Rから渡されたメモ리카ードか…」

H Gは自室のパソコンを起動させ、メモ리카ードを専用スロットに差し込む。

中には、文書ファイルと画像ファイルが数点あった。

H Gはまず、文書ファイルを開いた。その中には、『先日、Y 国際港に隣接する産業道路歩道上で、N 国の銃密売人が路上で倒れているのを発見し、身柄を港町水上警察署（この産業道路が港町警察署と港町水上警察署の管轄の境目）に確保した。発見者は捜査官K J。密売人は流感の熱で倒れていた。密売人の所持品から専用ケースに入った拳銃数丁が押収されるが、その内空のケースが一つあった。密売人からは、全部のケースに拳銃が入っていたはずとの証言があり、無くなった一丁の行方を探しているとの事』の内容の文と発見場所の印が入った地図が張り付けてあった。また目撃者や密売人発見者のK J捜査官の報告の記録が添付されていた。

また、画像ファイルには密売人が倒れていた場所と拳銃の入ったケースとかその中身の写真とかが数枚…

「これって、警察の仕事じゃん！なんで俺によこす？」

H Gは訳がわからずスマートフォンで、またR Rに連絡した。

「…なんだ、このファイル？これ警察の仕事だろ？」

『んはは…そうだけど、こちらが追っていた密売人でね…密売人の発見者が水上署（港町水上警察署）の捜査官K Jとあるだろ？お前の娘の一人、I Yの彼氏だから、なにか聞き出せないかなーと思って…』

「その言葉、I Yに言ってみろ！得意の踵落としを見舞われるぞ！」

『えっ？違うの？』

「違う…多分今の処は…I YはK Jを害虫の様に嫌っている…」

『んはは、害虫とはK J君も可哀想だね。そうか…無理そうか…なら、強引に訊きに行かせなくていいよ…ただ…』

「ただ…？」

『密売人から奪われた拳銃な、そこには書いていないが、どうも素人さん（一般市民）が持つて行ったらしい…』

「なに？何処の情報だ？」

『密売人が倒れていた場所近くの監視カメラだ…密売人が倒れていた所で密売人のトランクが転倒か何かした拍子にトランクが開いて、そこから出た専用ケースから拳銃らしき物と何かを取り出して、ザックに入れて、大事そうに抱えた男らしき通行人が映っている…画像ファイルの四〇六枚目をよく見ろ！なにせ、素人さんだ…ナニするか予測がつかん』

「そーだな…しかし、簡単に開くトランクなんて不用心だな…ウチのガンスミスの移送専用のケース売り込みたくなるな…」

『そういう話じゃなくて…だから、自警団として情報提供をしようと思って…』

「分った！気に掛けとくよ」

『すまん』

スマートフォンの通話を切った後で、

「…拳銃を持ち去った、素人か…厄介だな…RRの奴の策に乗せられるのも癪だけど…ひとつ、IYに頼んでみるか…」

HGはIYを自室に呼んだ。

「准尉、呼びですか？」

「おつ、IY。ちよつとこの文書ファイル見てくれ…」

と言つて、IYにPCの画面を見せる。IYは文書を見ながら、

「はい…えつ？KJつて、ちゃんと仕事してるんですね」

と、今更ながら言った。

「そくじゃない！」

とHGが呆れて言うと、IYは

「…密売人から、拳銃が盗まれたんですね…私達だって嚴重にロックするのに…」

「それも違う！」

「KJの奴…なにやってんでしょかね…しっかりして欲しいですね」

とIYが呆れて言うと、

「…それは、そうかも…」

「…で、拳銃を持ち去った犯人は？」

とIYは真剣にHGに訊ねる。

「そこにはないが、一般人の可能性が高い」

「そう…ですか。困りましたね」

「…だろ？自警団としての警戒情報なのでね。知っておかないと…」

…R RとH Gならびにその配下はY 国際港商店街自警団に所属しています。作者

「はい、そうですね」

とI Yは納得した。

「…まずは、情報収集だ。I Y」

「はい」

「K J君に会って、話を聞いてきてくれ」

「なんですと〜！…会って、何を聞くんですか？」

I YはH Gの命令を聞いて途端に嫌そうな顔を露骨にした。H GはそんなI Yをあえて無視して、

「密売人の持っていたケースに弾丸があったかどうかだ…」

「弾丸？」

「そう、ケースに弾丸が入っていたか、または拳銃のマガジンに弾丸があるかないかで、驚異のリスクの確率が大きく変化する。更に弾丸の数も…」

「…そうですね。確かに！」

「だから、押収した本人に訊ねるのが一番だと思うが、どうだ？」

「はい、そうですね…でも…」

I Yはまだ嫌そうにしていた。H Gはキレて

「なら…今日はもう遅いから、明日の朝一で行ってこい！」

「え〜」

翌日、I Yが沈んだ気分で港町水上警察署に行くと、入り口で交通課のM Sに出くわした。

「あら、I Yおはよう」

「あ、MSおはようございます」

「どうしたの？また、事件でも…」

MSはIYが来た理由を、また所轄内で事件があつて調べに来たかと思った（「巻き込まれ親父の厄災」参照）。IYはMSの『事件』という言葉にギクツとして、

「…別に…」

と俯いて誤魔化そうとしたが、MSはIYの挙動不審な事に、ますます訝しく思つて。

「えっ…ナニナニ？また、秘密で協力するわよ！」

とIYを署内の玄関ロビーの隅に引っ張って行きながら、MSが興味深々で訊ねた。IYは（あゝ、どうしよう！下手に“あいつを訪ねて来た”なんて言ったら、また店内で、冷やかされるし…おまけに、ここで変な噂を立てられるのは嫌だし…）と益々、俯いて暗い表情をしていると。

「あら？…まさか、KJ君を…」

とMSが言つたので、IYは、今度は真っ赤になって、

「ちっ…違います！」

「じゃ、ナニ？」

IYは誤魔化しが効かなくなつて（あのクソ親父！）と恨んだが、前の事もあつたので、
「実は、社長からKJさんが先日、産業道路で保護した人について聞いて来るように言われて…」

「その人、何かしたの？」

「はい…自警団の話ですので、事件と言う訳ではないのですが…KJさんが産業道路で保護した人が、何か落とし物をしたのでは無いかと…で、保護した人の持ち物の事を知りたいとの事で…」

とIYは、必死に自分はいくまでもHGの代理であり、自分からKJを訪ねて来たと言う事

の疑惑を晴らし、また、まだ事件ではないことを言い繕うために必死に誤魔化した。

「あらゝ、ホント？だったら、社長が来るんじゃないわね？」

とMSの「IYがKJを訪ねてきた」疑惑の追求は止まらなかった。IYは（勘弁して）
と思いつつ、

「いえ、社長は店のカウンターに居て、コーヒーを淹れています。実はTTさんの子供が昨日から風邪で熱を出して休んでいますので…それにHY先輩も…」

「あら、そうだったの！それは大変ね…彼、今日休んで居るわよ、何でも風邪引いたとかで…。隣のY市海道駅の警察合同官舎男子独身寮に居るわよ」

「ありがとうございます。後で店に行つて社長から風邪薬貰つて下さい。AKと共に…良く効きますよ」

「ありがと、勤務が終わつたら寄らせてもらうわ」

Y市警察合同官舎男子独身寮…

「…ここか…」

「すみませーん」

「はーい」

「あのゝ、ここに港町水上警察のKJと言う者が居ると聞いて来ましたが…」

「あら…あなた、白山亭のIYさん？」

「はい、そうですけど…？」

寮母がIYの事を知っているのを訝しく思つて返事をする、

「あらゝ、KJ君のお見舞い？彼も隅に置けないわねえー」

「違います！（なんで、私があいつの彼女なの！）」

「そんなに照れなくてもいいじゃないの！」

真顔で否定するIYに対して、笑顔で言う寮母にIY（KJの奴ーツ、何を言いふらして
るんだ！）と怒りを覚えた。そんなIYを玄関から見ていた複数の警察官達が、

「あ…あの人…確かKJの彼女の…」「確か白山亭のIYさん…」「KJの見舞いに来たんだ
…」「羨ましいな…」

とひそひそ話をしているのを見て、（早く帰りたい…）と思った。

「ごめんなさいね…KJ君の部屋に案内したいけど、ここ男子独身寮だから…それに、彼風
邪引いているし…布団から出られないから、ここに呼び出せないし…」

と寮母が言うと、IYは帰る事より、HGの任務を優先させる事にして、

「なんとか、会う事は出来ないでしょうか？」

と縋る様に言うと、

「ちよつと聞いてみるわね…」

と言って、寮母はKJの部屋に内線を掛ける。そして受話器を置いて、

「やっぱり…熱が高くてダメだつて…彼女にうつしたくないって…」

それを聞いて、（あのヤロウ！）と、IYの怒りは絶頂に達した。

「あつ、でもスマートフォンの番号教えるから、そっちに掛けてくれて…」

と言って、寮母はKJのスマートフォンの番号を書いたメモを渡した。

「…ありがとうございます！」

と言って、IYはメモを受け取ると、とつと寮を後にした。

白山亭母屋…

「IY帰りました〜」

とHGの部屋に入り、脱力感一杯の口調でIYが言うと、HGは壁の時計を見ながら、

「…大分時間がかかったが、彼に会えたか？」

「ずえんぜん（全然）…」

I Yが怒りの表情を浮かべたので、H Gは（K J君可哀想に…）と思った。

「風邪引いて寮で寝込んでいました…なので会えませんでした。これ、あいつのスマートフォン番号です」

と言って、K Jの電話番号が書かれたメモを渡す。H Gはメモを受け取り、反対側の手を出して、

「I Y、スマートフォン貸して」

と言うと、I Yはあからさまに嫌そうな顔で、

「ずえつたい嫌です！」

「つれないなあゝ、そんなんじゃ婚期逃すぞ…H Yみたいに…」

とH Gが言うと、

「なんですってー」

とH YがI Yの後ろから顔を出した。H GはH Yを見て、

「あつ、起きてきた…大丈夫か？H Y」

「おかげさまで、痛い飴舐めたおかげですっかりよくなりました…で、なんで私の婚期が関係するのですか？准尉！」

と言って、H YがH Gを睨みつけた。H Gは

「H Y…お前さん、まだ熱あるんじゃないの？空耳聞いたか？」

と言って、H Yの額に手を伸ばすが、H YはH Gの手を避けた。

「准尉…私も聞きましたよ（笑）」

とI YもH Yに加勢する。

「…うん、お前もK J君から風邪うつされて熱があるんだろう…」

とH Gが苦し紛れに言うと、

「誤魔化しはききません！風邪のせいにはしないでください！！」

とH YとI Y同時に言われて、H Gは

「あー、そう…俺は父親代わりとして、娘の幸せを心配しているのだよ」と言うと、

「あ、また誤魔化す！だったら、父親代わりとしてわたしの責任をとってください！」とH Gに迫るH Yに、

「なんで、そーなる？」

と言って、H Gはたじろいだ。H GとH Yのやり取りに、I Yが

「あの一、そろそろ本題に…」

「ほらみる、I Yのツツコミが入った…だからI Yスマートフォン貸して！」

「ずえったい嫌です！」

「なんで、嫌なの？減るもんじゃないし…」

とH YがI Yに訊ねると、

「いえ…私のスマートフォンにあいつの電話番号入れて発信したら、あいつのスマートフォンに私の電話番号がバレてしまい、私のメンタルが確実に減ります！」

「そーよねー」

I Yの話に納得するH Y。それに対してH Gは

「お前…なに急にI Yの味方してんだ？」

「乙女心って複雑なんです…准尉！わたしのスマートフォンに准尉以外の男性の電話番号入れてたら、准尉はやきもち焼きますか？」

とH Y得意の上目遣いでH Gに言う。

「話、逆じゃねえか？俺のスマートフォンに知らない女性の電話番号が登録されてたら、お前さんが嫌なんじゃないのか？それに、お前のスマートフォンにはS KとI IとA Mの電

話番号が既に登録されてんだろ！」

「…な、なんでそれを…？」

「そんなボケかますな！業務上必要だろ」

…HGとHYでは、なかなか夫婦漫才になりません(笑)作者

「えへへ…バレましたか…じゃ、准尉のスマートフォン見せてください！」

「ほら…」

とHGが自分のスマートフォンをHYに見せると、HYはそれを素早くひったくり、

「よっしゃー、准尉のスマートフォン奪ったぞー、今よ、IYこれでKJ君に電話して！」

と言って、IYにパスする。

「はい、姉さんありがとうございます！」

「なんだとー、こら返せ！」

HYに行先を阻まれているHGの目の前で、IYは妖しい笑みを浮かべると、

「いーじゃないですか、減るもんじゃないし…准尉の電話番号なら、あいつのメンタルの方が着実に倍々ゲームで減りますから…」

と言うと、HYは納得して

「言いて妙よー」

と、言った。

話の途中で、HGのスマートフォンの着信通知音が鳴る。

「おい！IY、俺のスマートフォン返せ！」

と言われ、

「ハイ！」

とIYは無意識にHGにスマートフォンを返す。HGはIYからスマートフォンを受け取る時、

「はい、大変お待たせしました。碓屋社長HGです…はい、MK社長毎度お世話になっております…はい？…警護依頼ですか？はい…えっ？IMさんではなくて？…はい、はい、…わかりました。すぐ伺います…はい、失礼します」

「准尉、今の電話、芸能事務所〇×エージェンシーですよね？」

とIYが訊ねた。

「そうだ」

「また、IMの警護で私に指名依頼ですか？」

とウキウキして言うIYに対して、HGは

「…いや、今回は違うそうだ」

「？」

「今回はアイドルユニット△△だと。取り敢えず、すぐ事務所に来てくれと言われた」

「そうですか…」

と言って、IYはIMの警護任務でKJがらみの件から逃れられると期待していただけに、当てが外れてしょげた。

HGは、IAに芸能事務所〇×エージェンシーの社長MKの所に行くので、車を白山亭の入り口まで回すように託けた。

「さて…と、今回は変なのが揃って来やがったな…」

「何がですか？」

とIYが訊ねた。

「密売拳銃の盗難。アイドルユニットの警護、みえない敵…」

「…なんですか、その『視えない敵』って、悪霊でも居るのですか？」

とIYが言うと、HYは蒼くなった。そんなHYを無視して、HGは目の前の畳を指さして、

「I Y」

「はい」

「そこに座りなさい！」

「座ってます」

I YはH Gの前の座布団に座っていた。

「悪霊が敵とは誰が言ったんだ？」

「いや、視えない” って、准尉が…」

「その “視えない” ではなくて、 “見えない” の！風邪だよ、流感！」

「あつ、そっちですか…。でも、流感はさっき対処しましたから、考えなくても良いのでは？」

「そうだな…少なくとも、ここではね」

「？」

首を傾げているI YにH Gは呆れて、

「じゃあ、俺のスマートフォンでK J君に電話するのは許すから、I Yお前が聞き出せ！」

とH Gが言うと、I Yは再び

「嫌です！」

と言って、拒否した。

「だったら、堂々巡りになるぞー（しまったー、H Yが俺のスマートフォン奪ったノリでI Yに掛けさせればよかったー、M K社長めー）」

と、H Gは八つ当たり状態になる。それに対して、I Yが

「どうすれば、いーんですかー!!」

と聞いてきた。H Gは

「じゃ、こうしよう…I Yお前が電話してK J君から話を聞き出す…」

「嫌です！」

「おい、まだ話は終わってないぞ！」

「？」

「後で見舞いを持っていくと言って、例の飴を渡す…これでどうだ？」

「なんですか？ 准尉！ その一方的に私が不利になる条件は！…でも、あの飴をあいっつになめさせるのは、ちよつと魅力がありますね…」

「だろ？」

「あのー、准尉…そろそろ芸能事務所〇×エージェンシーの社長M Kの所に行かないと…表でI Aがイライラしていますがー」

とT Yが玄関口でH Gを呼んだ。

「わかった、T Y。今行く！」

と、H Gが玄関に居るT Yに向かって返事をする、I Yに対し、

「命令！」

と軍隊口調で言った。

「ハッ！」

と、返事をしてI Yは畏まる。

「母屋の固定電話でK J君に電話して、さっきの話を訊き出せ。無論、訊き終わったらK J君の電話番号は着拒に設定しろ！」

「ハイ！」

「じゃ、行つて来る。留守を頼む」

と言ってH Gは鴨居にかけているハンガーから上着と帽子を手に取ると、玄関に向かった。

「はい」

I Yは仕方なく食堂の電話子機を手にとると、K Jに電話を掛けた。

『はい…ゴホゴホ…』

「あのー、I Yですけど…」

『えっ、I Y？白山亭の？』

「そうと言ってますが…（怒）」

とI Yはいつもの塩対応の口調で言うと、

『ごっ、ゴメン…ゴホゴホ…あつ、さっき官舎に来てくれてありがとう』

「べっ…別に…社長の命令だから…」

と言うと、後ろに居るH Yが「やゝい、ツンデレー」と言っぴひやかす。I YはH Yを睨んだ。

『そうなんだ…で、なに？』

「あのですね、先日あんたが保護したN国の拳銃密売人についてなんだけど…」

『ゴホゴホ…なんで知ってるの？』

「あなたも、キチンと仕事しているなうと思ったので…（後ろで、H Yが「はよ、訊け！」とI Yを急かす）、いや、社長が自警団の情報だと言っていたので…」

『そうなんだ…情報が早いね。で何を訊きたいんだい？』

「社長がね、押収したケースに弾丸が入っていたか、または拳銃のマガジンに弾丸があるかないか、また弾丸の数も知りたいって…」

『そう…ゴホゴホ…それは、ケースに弾丸を入れる場所があつて、そこに六発の弾丸が拳銃と別に入っていたよ…ゴホゴホ…拳銃にはマガジンは入って無く、拳銃とマガジンはケースに別々に入っていた。それらが一ケースの中身全部盗まれた…ゴホゴホ…N国製の有名な拳銃』

「…ありがとう…お礼は…」

『感謝してくれるんだ！じゃ、治ったらデートして！！』

「…それは、お断りします！でも、後でお見舞い持って行つてあげます」

と言つて、I Yは速攻で電話を切ると、急いで発信番号を着信拒否に設定した。

「うわー、速攻…」

と言うH YにI Yは、手を出して

「姉さん、私にC国の風邪薬ください！」

「いいけど…あれ持つてくの？マジで？」

「はい…あれつて、良く効くじゃないですか…姉さん！」

「…チョット！I Y…あなた悪い顔になっているわよ！」

「そうですかぁ？ウフフ…」

I YはK Jから聞き出したことをH Gにメールして、その足で再びY市警察合同官舎男子独身寮に行くと、その寮母に

「私からのど飴の差し入れだと渡していただけますか？あと、この見舞いの品を…」

「…あら、のど飴つて、これ一つ？」

「はい、今度白山亭で売り出そうとしている新商品なので（大嘘（笑））、皆で評価中ですので…人気があつて、もうこれしか残っていないくて…ゴメンナサイ」

とI Yは悲しそうな芝居をして、寮母にC国の風邪薬と店のお菓子の包みを渡した。

…その後は…ご想像通り…作者（笑）

●警護依頼

I YがK Jに電話をしているのと同時刻…

「なんで、E Yが乗っている？」

とH Gが言うと、I Aが

「はい、准尉が車を回して来るように言われたので、駐車場に案内して乗せてきました」

「…そうか、じゃ一緒においで、仕事の依頼だ。I A運転頼む、行先は帝都にある芸能事務所○×エージェンシー事務所…」

「はい」

H Gは途中で、I Yの報告を知った。

「I Y…嫌な役目だろうが…よくやってくれた」

芸能事務所○×エージェンシー事務所…

いつもの様に受付から社長秘書の内線にかけて来訪を告げる。

迎えに来た社長秘書に案内されて最上階の社長室に通された。

社長室の手前に秘書の居るフロアがあり、社長秘書は机の上の内線電話の受話器を取ると、「社長、碓屋のH G様と社員の方をお連れしました」と言うと、「ああ…通してくれ」と返答があった。

「では、碓屋様こちらへ…」

と言って、社長秘書が社長室のドアを開けた。

「やあH G。待ってたわよ」

以前、この芸能事務所所属の世界的人気歌手I Mが全国ツアー中に乗船したフェリーが乗っ取られ、I Mとツアースタッフを救出して以来（「巻き込まれ親父の突撃」参照）、この芸能事務所のM K社長からの鍵屋に対する信任は厚い。

「この度は、当社碓屋のサービスを御利用いただきまして誠にありがとうございます」

H GとI Aが挨拶する…このセリフが今や定番になっていた。E Yも慌てて頭を下げる。M K社長がE Yの姿を見て

「あら？新しい娘？」

「あつ、彼女はY海軍基地の海兵隊から実習に来ている娘です」

「初めまして、E Yと申します」

「…と言う事は、また娘が増える可能性もあると言う事ね。あたしは、この芸能事務所〇×エージェンシーの社長のM Kよ。よろしくね」

「はい」

H G達は、M K社長に勧められるまま、ソファーに座ると、

「で、要件と言うのは、今回はアイドルユニット△△の警護と伺っていますが」

「そこのよー、その事なんだけどね…実は、大変なことになっちゃって」

と言う、M K社長のいつもの話の出だしに、H Gは（またかい！）と突っ込みを入れた。M K社長から依頼理由を訊ねると、M K社長は一通の封書をテーブルに投げだした。その時テーブルにコツンという音がしたので、H Gは（中に何か入っているな？）と思った。

「社長…今、音がしましたが、中身開ける前に調べましたか？」

「そうね、以前の事があってから、H Gのアドバイス通り、金属探知機で調べたり、X線検査機で調べたわよ」

「ありがとうございます。で？」

「中身は…これっ」

と言って、M Kは封筒を開けると、中から銃弾が出てきた。H Gはそれを見て

「ほーお、N国製の拳銃弾ですか…」

「やっぱり、そう思う？」

「脅迫文を…失礼…」

と言って、手に取り開いてみた。それには

『○月××日××△日に海浜アリーナで行われるアイドルユニット△△のコンサートをやめろ、でないと、アイドルユニット△△に対して、これと同じ銃弾を打ち込む』

と…

「そんなこと言われても、もう海浜アリーナの会場スケジュールもあるし…何よりも金が…」

と、MK社長は、いつものように頭を抱えて言った。HGはスマートフォンで脅迫文と銃弾を撮影すると、（またベタな脅迫文だな…どっかで見たような…これって、定型文があるのかな？）と思った。

…ベタで悪かったな！（怒）作者

「…なるほど、そういう理由ですか。質問があるのですが」

「どうぞ」

「警察に話しました？（お約束!）」

「そんなこと、できるわけないでしょ！警察に話したら、アイドルユニット△△のコンサートコンサート自体が行えなくなってしまうじゃないの！（お約束!）」

と、憤慨するMK社長に対して、HGは（だろくな）と思って、素知らぬ顔で

「五人組のアイドルユニットでしたよね…確か」

「そ…よ」

「すると、今までのIMさんとかのケースですとライブルの芸能事務所…それも、アイドルユニットが居る…そこからの嫌がらせとか、五人の内誰かがこじらせたファンに恨まれていたとかのパターンですかね」

「うーん、やっぱりHGもそう思う？IMと違って△△のライブルの芸能事務所はいくつもあるし、またこじらせたファンに恨まれている線も数えきれない程よ」

「…そんなに？」

とHGが驚くと、MK社長はソファーに深く座り、

「そーよ、IMの方が特異なのよー。皇国を代表する人気歌手だけに」

「今回は拳銃弾送ってくると言う事は、かなり本気ですね」

「そうねえ、△△の場合は、ただの脅迫だけの愉快犯が圧倒的に多いけど、今回は、多分実行する気満々だと思うのよ」

「そうすると…本当に△△に張り付いて、二十四時間警護しないといけませんな」

「そーなるよねー」

「質問ですが、△△の人達は、各自バラバラに住んで居るのですか？」

「そうね、そのことなら…今一つの借家を借りて住まわせてるわ…場所はレッスン場所のスタジオの近く…あつ、それ内密にね！」

「はい、守秘義務は守りますよ。そこには、△△の人達だけですか？」

「いや、マネージャーも居るわよ。もちろん女性だけど」

「その人達の服のサイズ…S M Lのサイズですけど…防弾着の関係で…教えて貰いますか？」

「秘書から連絡させるわ」

HGとMK社長のやり取りを見ていたEYは（へー、芸能人の警護かあ…これはいい経験と調査のチャンスだ！）と考えた。

「わかりました。今回は、脅迫犯が多分、拳銃を持っていると言う点では当社を選ばれたこととはいい事だと思います。ただし、こちらと致しましては、その分危険度が増すのと、五人を警護するため、ある程度五人方々にはこちらの指示に従っていただくことをお約束願いますでしょうか？」

「それは、あたしから彼女達に言い聞かせるわ。で見積もりはいくら位？」

「そうですね…脅迫犯が絞れないのと、拳銃を持っている事、警護対象が五人と言う事と、こちらから出す人数を…、ざつと…△，◎×▽万皇園位で、あと防弾インナーなどの必要経費は別途。また脅迫犯を捕まえた成功報酬は…×，×□○万皇園位で、一応どうですか？」

「あら、いつものIM達より高いわねー」

「五人の内一人に対象が絞ればいいのですが…なにぶん警護対象者はこちらから出す人員との兼ね合いで…」

「そうね…いいわ…それで」

「はい、ありがとうございます。詳細な契約書は帰って作成いたします…ところで、この拳銃弾どうします？保管については、危険物の取扱いが必要になります…」

「じゃ、持っていていいわよ」

「はー」

と言って、HGは弾薬をハンカチにくるんでポケットに入れた。

HGはMK社長と握手した。

それを見ていたEYは（こんな風に契約するんだ…もっとキチンとした価格表とかあるかと思った）と疑問に感じた。

帰りの車内で、EYはHGにさっき自分の感じた疑問を素直にHGにぶつけた。

「警護の見積もりって、あんなにどんぶり勘定でいいのですか？価格表とかないのですか？」

「警護任務って、当社の場合は、色々なパターンがあつてね。これと言った値段が付けられないんだよ…それこそ、今回の様な殺人予告のモノから、ただの愉快犯、ストーカーとか…事務所の芸能人が実際に凶器で襲われたり、殺されるのを警護するのに、納期や経費それに人件費なんて細かく計算できないよ…だから、当面のザル見積もりを出して、事件が解決す

れば、それまでの費用を算出して請求するのさ」

「…だから、向こうの社長さんも真剣に価格を値切らなかったのですね？」

「そう…事件解決後の請求で値切ってくるからね…こちらも、そのつもりで請求書出すんだけど、今のところ、成功報酬は割り増しして出してくれている」

そんなやり取りをしている間にHGは（脅迫状に入っていたN国製の拳銃の弾丸、犯行予告の海浜アリーナ…Y国際港の街で盗まれたN国製の拳銃と弾丸…なんか結びつくみたい…）と考えた。

●依頼実施

HGは白山亭に帰ると、母屋の食堂に息子娘達を招集した…今回はその中にEYも入っていた。

HGは芸能事務所〇×エージェンシーのMK社長からの依頼内容を説明した。

「…と言う事だ。今回は警護対象が五人になった…とはいえ、彼女達は一つの借家で共同生活しているから、ウチから五人全員出さなくて済みそうだ…で、人選だが、マネージャー含めて全員女性なので、まずAMは除外」

「は…い」

「警護の指揮をHYにして、TYとIAでいいか？」

「…ハイ…」

「HY、体調は？」

「おかげさまで、万全です」

「よし、頼む」

「はい」

「HG社長、自分も警護に参加させていただきませんか？」

「…E Yさんか…残念だが君はここに残ってもらう」

「何故でしょうか？」

「今話した通り、相手は拳銃の所持を示唆している。そのため、こちらも銃で対抗する必要があるので、特別銃器携帯・使用許可証を持っていない以上、参加は認められない」

「…分かりました（だから、特別銃器携帯・使用許可証を皆持っているんだ）」

「では、今言った者は、完全防弾（D国製の防弾インナー着用）の上、拳銃で武装しここに集合、アイドルユニット△△が居る借家に連れて行く、それから警護対象者に貸し出す女性用防弾インナー六着用意、サイズはこれ」

と言って、M K社長秘書から送られてきたサイズデータを見せる。

「以上！かかれ！！」

「「ハイ！」」

母屋の階段を駆け上っていくH Y達の後に残った人に対して、H Gは

「I Y」

「はい」

「K J君に対する聞き込み、ありがとう…」

「…いえ、あいつにあの飴差し入れしてきました…味に苦悶するのが見られないのが残念ですが…」

と、I Yが言うと、H Gは顔をしかめて、

「酷い事するな」

「でも、効き目はあるのでしょー！」

I Yがシレっと言った。

「まあ、いい…それよりもI Yに残って貰ったのには訳がある」

「盗まれた拳銃の搜索ですか？」

「そう…分かっているねえ―」

「…それは、もう…准尉は、アイドルユニット△△の脅迫犯と結びつくのではないかとお考えなんですね？」

「そうだ…A M、M P」

「はい」「ハイネ」

「二人は、I Yの指揮で、近所でN国の拳銃密売人から盗まれた拳銃の捜索を行う」

「…准尉！それは、警察の仕事ではないですか？」

とA Mが当たり前の様に言うと、H Gも困り顔で、

「そうなんだ…A M、言いたい事はわかるが、俺はI Yが風邪で伏せているK J君から情報を引き出してくれた苦勞を報いてやりたくて…」

とH Gがわざとらしく、泣きまねすると、A MとM Pがそれに乗っかって

「そうですか、I YがK J君の為に…尊い犠牲だ…」「I Y、妬けるネ…ヒューヒュー」

と言って、I Yを冷やかす。I Yは顔を真っ赤にして、

「やめてください！」

「あと、E Yさん」

「はい」

「君は、I Yの指揮下に入れ」

「はい」

H Gは自室のP CでR Rから貰った資料をA M達に見せて、画像データの中から、拳銃を盗んだらしい人物の画像をクリアにする作業をするが、なかなかうまく行かない…そうしているうちに、また玄関からT YがH Gを呼ぶ声がした。

「…俺は、あいつら（H Y達）を送っていくから、後を頼む」

「ハイ！」

●結びつく事象

HY以下、アイドルユニット△△警護の組をHGは車で任務先の借家に送り届けた。

借家には、アイドルユニット△△のマネージャーも同居していて、芸能事務所〇×エー・ジエンシーのMK社長から既に話がされていた。借家の玄関口で出迎えた女性が

「碓屋のHG社長ですね、私はアイドルユニット△△のマネージャーのKYです。うちのMK社長から話を聞いています。この度はよろしくお願いいたします」

「碓屋社長HGです。紹介は中に入ってからにしましょう」

「そうですね、では中に：彼女達も既に集めています」

HG達は借家に入っていた。

居間にはアイドルユニット△△の五人が居た。HG達を見ると、

「あ、碓屋のエージェントさん達：IM先輩の警護をよくする…」

「IM先輩が言ってたけど、本当に歳の近い女性の人達なんだ…」

とヒソヒソ話をしていた。それを聞いて、HYが複雑な表情をする。

皆の前で、HGは

「初めまして、碓屋社長HGです。今回はそちらの芸能事務所〇×エー・ジエンシーMK社長から警護の依頼を受けて来ました。ここにいる当社のエージェント達が警護します」

「よろしく願います。HYです。こちらの現場を指揮します」

「TYです。よろしく願います」

「IAです。よろしく願います」

「私はアイドルユニット△△のマネージャーKYです。よろしくお願いいたします」

「私はアイドルユニット△△のリーダーGGです。よろしくお願いします」

「わたしはアイドルユニット△△のサブリーダーJAだ、よろしくお願いします」

「あたしはアイドルユニット△△のKBです、よろしくお願いします」

「わたしはアイドルユニット△△のLCだよ、よろしくお願いしますね」

「私はアイドルユニット△△のODです、よろしくお願いします」

「わたしはアイドルユニット△△のPEよ、ヨロシク」

と、挨拶を交わした。HGは、マネージャーのKYを見て（…なんか、どこかで見たような…）と感じたが、

「じゃ、顔合わせは済んだと言う事でHY、マネージャーのKYさんと話をしてくれ」

「はい」

「では、俺は帰る」

「お気をつけて」

と言って、手を振るHYに

「うるせえ！度々事故ってたまるか！（巻き込まれ親父の厄災」参照）」

帰りの車の中で、お気に入りの音楽をかけていて、ある歌手の歌が流れた時に

「…もしや？」

とHGは独り言を言った。

HGが白山亭の母屋に帰ると、HGの部屋のPCの前で、IY、AM、MP、EYが何やら話し込んでいた…HGは（あいつら、俺のPCからまづい画像でも見つけたかなあ…）と思って、後ろから覗き込むと、先程HGが挑んでできなかったRRから貰った画像データの中から、拳銃を盗んだらしい人物の画像を見事に鮮明にしていた。

「…お前達、どうしたんだ？これ」

「はい、MPがAIを使って鮮明な画像にする事に成功しました」

とAMが答える。その隣で得意げになっているMP。

「MP！よくやった！！」

「ハイネ…HGに褒められて嬉しいネ」

「…さてと、容疑者の姿が分かったものの…」

とHGは言って、いつもの親父モードに入る。

AM「この写真を持って聞き込みをしますか？」

MP「警察に渡すネ」

IY「自警団からの情報なので、まず他の自警団の方々に情報共有した方がいいと思います」

HG「まずは、そうするか…」

MP「それにHYに教える事ネ」

HG「そうしよう」

AM「HY姐さんに教えて、あちらの人に見て貰うと言うのはどうですか？」

HG「そのココロは？」

AM「准尉がこの話に引っかかっているのは、依頼のあったアイドルユニット△△の件と、この件が関連していると読んでいるのでは？」

HG「そう、俺はそう感じているのだが、いまいち確証がない」

AM「でも、HY姐さんに情報共有する事は問題ないのでは」

HG「そうだな」

EYはいきなりHG達が次々考えを述べながら状況整理する手法を驚いて見ていた。（これだが、碇屋の結束の秘訣？）と思った。

HG「EY、君はどう思う？」

と、HGにいきなり、振られて会話に引つ張りこまれて戸惑った。

EY「自分は、HG社長の仮説が正しければ、HYさんに情報を提供し、アイドルユニット△△の面々にこの画像を見て貰って、心当たりがあるか尋ね、その一方で、この写真を街の方々と共有して探すという事を考えました」

HG「そうなんだ…それでいいとは俺も思っているが、もっと効果的に拳銃を奪った犯人を炙り出す手がないかを考えている」

IY「なるほど、効果的に炙り出す手ですか…アイドルユニット△△のコンサート前に脅迫犯を抑えようと考えているのですね」

HG「そうだ…ローラー作戦では時間がかかりすぎる。△△の海浜アリーナでのコンサートまで、あと三日だ」

EY「ならば、海浜アリーナの監視カメラのチェックと、アイドルユニット△△のコンサートチケットの購入者でこの近所の人をピックアップしてみたらどうでしょうか？」

HG「容疑者は産業道路で銃密売人のケースから拳銃を持ち去ったと言う事から、この近くに住んで居ると仮定して、コンサートチケットの購入者を洗い出すと言う事か…それから既に事前に犯行場所の下調べを済ましている…」

EY「そうです。ダメですか？」

HG「…EYさん、この話し合いは、可能性についての話し合いだ。出された意見は全否定しない…だから自信をもつて発言したまえ」

EY「はい、ありがとうございます」

AM「事前の下調べの可能性か…これは気づかなかった…」

IY「コンサートチケットの購入者を洗い出すと言うのも、盲点でしたね」

EY「これは、脅迫犯はこの地元に居ると言う仮説からです。他所の人なら漏れるかもしれません」

H G「E Yさん…だから、自分の意見に自ら否定的にならない…一見、誇大妄想とか無理な事でも何かのヒントになるかもしれないよ…。俺はコンサートチケットの件はいい考えだからやってみる価値があると思うぞ…さて、炙り出す方法が見つかったから、実行してみるか…」

「「はい」」

●勢子と射手

H GはE Yの提案を受け入れ、芸能事務所〇×エージェンシーのM K社長から今度の海浜アリーナで行われるアイドルユニット△△のコンサートチケットの購入者情報入手して、Y 国際港近辺の住所の人物をピックアップする様、E YとI Yに命じた。

次に、H GはH YとR Rならびに自警団に鮮明になった拳銃を盗んだらしい人物の画像を共有した。その上で、H Yにアイドルユニット△△にあたる様に指示した。

さらに、H GはA MとM Pに海浜アリーナの監視カメラのチェックを命じた。

「さて…勢子は動き出したが…相手をうまく炙り出す事ができるか？」

と、H Gは思案顔で呟いた。

…やがて

「准尉！見つけました。二日程前ですが、例の人物がスタッフ入り口付近で怪しい動きをしています」

とA Mの報告が入ると、I Yも

「准尉！コンサートチケットの購入者からこの近所の人のピックアップが終わりました」

「I Y、対象人数は？」

「十人です」

「問題は、海浜アリーナのどこで狙撃するかだな…A Mが見つけたスタッフ入り口か、それとも、コンサート中のステージか…」

とH Gが顎に手を当てて考え込む。するとI Yが

「准尉、犯人は脅迫状を送った以上、アイドルユニット△△に我々の様な警護がつくと考えるのでは？だとしたら、スタッフ入り口で犯行を阻止され、出来ないと思ったら次に、警護が手薄のステージに居る時を狙うと考えます…相手が素人なら、かなりの至近距離に近づかないと、犯行が出来ないと思います」

I Yは過去のI Mに対する警護の経験から、H Gに進言した。それを聞いて、H GはI Yの進言を受け入れ、

「では、その中のステージに近い席の人は？」

「二人です」

「…それが、脅迫犯と言う事になる…住所は？」

「いこです！」

と言って、I Yが地図を指すと、H Gは、

「よし、A M…行って確認して来い」

「はい、准尉！」

そのやり取りを見ていたE Yは（H G社長の指揮で各自、自律して動いてる…）と感じた。

一方、H Yからも

『准尉…准尉からの画像の人物について聞き込みが終わりました』

「で、結果は？」

『それがですね…△△のメンバーではなく、マネージャーの知り合いだそうです…』

「ナニ？」

『マネージャーの知り合いで、白山亭のあるY国際港の街に住んでいるそうです』

H Yの話からH Gは（ビンゴ…追い詰めたか…さて、どうするか？）と考えた。そして、

「H Y、マネージャーと話がしたい、代わってくれ」

『それが…目を離れた隙に居なくなりました…すみません!!』

「アイドルユニット△△の警護が任務だからな…マネージャーまで手が回らなくて当然だ。そのまま任務を続行しろ」

『はい』

H GはスマートフォンでA Mに対して、

「A M、そっちにアイドルユニット△△のマネージャーが向かった。この写真人を見つけたら、有無を言わず保護しろ！」

と言って、H GはK Yの顔写真をI Y達と共有した。

『ハイ』

「I Y」

「はい」

「A Mの加勢に行ってくれ」

「はい」

「…さてと…最悪な事態になればいいのだが…めんどくせー」

一時間後、I Yに伴われてマネージャーのK Yが白山亭に現れた。

バーカウンターに居たT Tが（また…女…しかも年増…准尉の年増キラって、もう勘弁して!）とH Gをジト目で見る。そんなT Tにお構いなしに、H GはI Yが連れてきたK Y

を店の奥のテーブル席に座らせると、

「I Y、どこで保護した？」

「例の人物のアパートの前の通りに差し掛かる手前です」

「では、アパートからは？」

「見られていません。引き続きA M先輩が張込んでいます」

「うん、よくやってくれた…保護しないと大変な事になる」

「？」

「例の人物に人質になる可能性と、流感に感染する可能性だ」

「あっ！」

I YはN国の銃密売人が流感の熱で倒れていた事を思い出した。

「…さて、K Yさん」

「はっ、はい」

「まずは、手荒な事をしてすみませんでした」

「いっ、いえ…」

K Yは少し怯えていた。H Gは女給姿のM Pにコーヒーを持ってくるよう指示をすると、

「今、私と部下の話を聞いていたと思います」

「はい」

「まずは、その一つの可能性についての解決策を…この飴舐めていただけますか？」

と言って、H Gはテーブルの上にC国の風邪薬を置いた。それを見たK Yは不思議に思い、

「はい？」

「実は、この飴…風邪薬でして…いま流行っている流感に良く効くのです。それに予防効果もあるらしく、私どもの部下と店員に配ったら、それがなんと！風邪を引いて横になっていた者は熱が下がり、私ども風邪を引いていない者も今のところ風邪を引いていません…感

染者と接触したにも関わらずにですよ！……これ一つで今日も流感知らず……どうでしょう？」

H Gの通販番組調にC国の風邪薬を説明するのを、(親父：通販番組じゃないから……(笑))とI Yが突っ込む。

「…そうなのですか？」

まだ不安が払拭できないK YにI Yが

「それにつきましては、手前どもの社長の言っている事が大げさではない事を保証します。今△△のメンバーが生活している借家に居る、弊社のH Yは、昨日は部屋で熱出して伏せていましたが、この風邪薬で熱が下がり、あの通り仕事をしています」

と説明すると、K Yが安堵して、

「そうですか、ではいただきます」

とK Yが口に入れようとしたので、H Gが

「おっと、その前に」

「？」

「そののど飴は、大変苦くて辛いので、口に入れたらすぐ小さじ一杯の蜂蜜を口に含んで下さい：I Y、蜂蜜厨房から貰って来て」

「はい」

「あー、H G社長？」

「なんですか？」

「先に、蜂蜜口に含んでから、その飴口に入れるのでは、いけませんか？」

「しまったら、そうすればよかった！」

「どうしました？」

「はい、あなたの指摘はごもつともです。それでいいです」

と言って、H Gは苦笑いした。

I Yが厨房から蜂蜜を貰ってきて、K Yはそれを口に含み、のど飴を口に入れた。K Yは平然としてのど飴（C 国の風邪薬）を舐め切った。

「では、一つの問題は解決しました。次の可能性につきまして、お話ししましょうか…」

「はい」

K Yは観念した様子で応じた。

「まず、K Yさんが訪れようとした先の人物との関係を教えて貰えますか？」

「はい、K Eと言って、私の弟になります」

「弟さんですか…」

「はい」

「弟さんの所に行って、どうするおつもりですか？」

「あの子が、私がマネジメントしている△△に脅迫状を送るなんて…その理由を問い正しに行くところでした…でも、さっき“人質”と言ってましたが…何故です？」

「…実は、まだ確定していないのですが、弟さんは拳銃を隠し持っています」

「えっ！」

「…すみません、まだ確定していないので、店内ではお静かに…」

「ハッ、ハイ」

「実は、先日この近所で密輸拳銃の盗難がありまして…もうお分かりだと思いますが、あなたの事務所に送られてた脅迫状に入っていた銃弾の事です」

とH Gが話したら、K Yは口を手で覆って、絶句した。

「では、弟がその密輸拳銃を持っていると？」

「まだ確定はしていませんが、私はそう思っています」

「私は…どうすれば…」

「安心してください。まだあなたの弟さんは、あなたの事務所に脅迫状を送った偽計業務妨

害に留まっているだけです。私達は弟さんがあの脅迫状に書かれたことを実行しない様にするのが任務です」

「私が弟に自首を勧めます！」

「それがいいと思いますが、いまあなたが行かれると弟さんが何をするか判りません」

「…」

「私に、ある考えがあります」

「なんですか？」

「まず、弟さんの身柄を確保します」

「はい」

「次に弟さんが拳銃を持っている事を確認し、それを警察に届けさせます…拾得物として」
「？」

「当然、警察としては、盗まれた拳銃の弾丸の数が足りませんので、その行方を探します」

「そうなりますね…」

「その弾丸はあなたの事務所にありますが、実は私が回収しました」

「え？」

「これで、弟さんが警察に拳銃と弾丸を持って行く時にこっそり混ぜれば弾丸の数は揃います」

「あっ！」

「おたくの社長（MK）は、脅迫状の事を公にしたくないので、弟さんが何故脅迫状を送ったのか、その理由を訊いて原因を解決すれば、万事何事も無くなると私は考えています」

「…そこまで…ありがとうございます」

「いえ、まだ肝心の弟さんの確保と、拳銃の確認が済んでいません…これから弟さんの所に行きましょうか」

「はい」

「でも、その前に、I Y」

「はい」

「防弾インナーを彼女に貸してあげて」

「はい、わかりました」

I Yの後について行こうとするK YをH Gが声をかける。

「K Yさん、ちよつと！」

「はい？」

振り返ったK YにH Gが

「間違っていたら、すみません…あなたは、昔アイドル歌手をやっていませんでしたか？」

「はい…よくご存じで。私はM K社長の事務所のアイドル第一号でした。その後、アイドルを辞めて女優に転進しましたが、今では引退して、後進のマネージャーをしています」

「…やはり、どこかで見たような気がしていましたが…そうですね、実はウチのエージェント達を送って行った帰りの車の中であなたの曲がかかって、思い出しました…私あなたのファンです…いまでも」

「ありがとうございます」

と言って、K Yは笑顔になると、I Yと母屋に向かった。それを見ていたT T（なんですつて（怒））と、持っているコップにヒビが入った。

「M P」

「ハイネ」

「コーヒーのテイクアウトを三人分用意する様にT Tに言って」

「ハイネ」

防弾インナーを着たKYを連れて、IYとHGとEYはAMが張り込みしているアパートの傍に来た。

「AM、どうだ？」

「全く出入りないですね」

「そうか…では、KYさんお願いします。IY一緒に、あと例の飴とテイクアウトのコーヒー持って行って」

「はい」

「准尉、あの方は？」

「容疑者のお姉さんだそうだ」

「大丈夫ですか？」

「対応策を教えて、IYを付けた」

「准尉…やはり今回は我々警察みたいですね」

「そう思うか…俺もだ」

KYはIYと共にKEのアパートの部屋の前に行き、KYがインターホンを鳴らした。中に居るKEはモニターでKYの姿を確認し、玄関ドアを開いた。

「姉さん…どうしたの？それに後ろの人は…確か白山亭の…」

KEの言葉にIYは（しまった、地元だから知られているか…）と不安になった。IYの左耳の補聴器のマイクからKEの言葉を聞いたHGは

「その為のコーヒーだ、持って上がり込め」

と指示を出した。IYがコーヒーを持ち上げるのを見たKYはKEに対して

「そうよ、白山亭のIYさんよ、ウチの事務所のIMと仲良くしてもらっているから。あなたの用事が済んだらこのまま一緒にY港街ショッピングモールにお買い物に行こうと思っ

て…それから白山亭からコーヒーのテイクアウトをしたんで、持ってきて貰っちゃった！
とにかく上がらせて、折角のコーヒーが冷めてしまうわ」

それを聞いたHG「凄い、さすがアイドルの後はサスペンスドラマで女優やってただけに、咄嗟の機転を…」と言って感心していた。

IYも（凄い！流石元女優さんだ…）と驚いた。

…KYの全盛期は、IYが生まれる前の話です。ですので、KYのアイドル時代も女優時代も知りません。作者

KEのアパートに上がる事が出来たKYとIY。テーブルを挟んでKEと座り、IYは紙袋からコーヒーのカップと砂糖・ミルク・マドラーを出す。KYはその一つをKEに差し出すと、開口一番

「コーヒーで良かった？白山亭はあなたの好きな紅茶より、コーヒーが有名だから…それから、あなた風邪ひいてない？この所流感が流行っているから…私気になって見に来たのよ」

「…ありがとう、姉さん、実は風邪ひいて熱があるんだ」

「えっ？そうなの？じゃ横になっていいわよ」

「それより、姉さんにうつすかも…」

「いいのよ、そんな事だろうと思って、風邪に良く効く飴を白山亭で頂いたの、IYさんがその効き目について説明してくれると言うので、それもあるから一緒に来てもらったのよ」
「そうなの？」

KYの機転にIYは（マジッ!）と思いつつも、

「あっ、説明しますね。この飴C国の風邪薬だそうです。マスターのご友人の貿易商から入手したそうです。試しに熱で店を休んでいた人はこれを舐めて小一時間で回復しましたし、予防効果もあるみたいで、私も舐めました。現在店内では流感になった人はいません」

と言って、I YはテーブルにC国の風邪薬の飴を置いた。

「なんでも、店内で取り合いになっているみたいで、私も後でI YさんからI MとC Eとウチの子達の間も貰う事になっているのよ」

とK Yがシレつと言うと、それを聞いたH Gはギョツとして（まだ数残っていたかな…足りなきゃR Rの所に貰いにいくか…）と考えた。

「ありがとうございます…で、姉さんは」

「お店でいただいたわ…だからあなたは心配しなくていいの」

K Eが飴を口に入れると、途端に

「…なにこれ？姉さん…苦い、辛い！…」

と言って、飴を吐き出した。

「ダメでしょ、全部舐め切らないと…」

と言って、K Yがテーブルの下の飴を取ろうとして、K Eの後ろのベッドの下に鈍く光る物を発見した。

K Yは隣に座っているI Yの膝を叩き、合図をした。I Yは頷くとK Yは

「どうしましょ…飴はこれ一つしかないし…洗えば大丈夫かしら…」

と言いながら台所に向かった。I YはテーブルにあるコーヒーをわざとK Eの方に倒して、K Eにコーヒーをかける。

「すみません…すぐ代わりを…じゃなくて、何か拭くモノを…」

と言って、ベッドにあるタオルをテーブル越しに取ろうして、これもまたわざとテーブルの反対側に倒れる。

「キャッ！」

I Yは倒れてベッドの下にある拳銃を見つけた。それを素早くジャケットの中に隠すと、I Yはあらためてタオルを取ってK Eにかかったコーヒーを「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ」

と言いながら拭き始める。

「あら、I Yさん…どうしたの？」

台所から洗った飴をつまんで、K Yが覗き込む。

「スママセン…コーヒーをこぼしてしまつて…」

「あなた意外とドジっ子なのね」

と言いながら、

「ほら、あんたも服脱ぎなさい！洗濯してあげるから…I Yさん、大丈夫？」

「はい…」

と言うと、I YはK Yにウィンクをした。K YはI Yが拳銃を確保した様なので、

「I Yさんは、むさい男の裸は見たくないわよね、こっちに來てくれない」

と言って、台所にI Yを呼び込む。I Yはテーブルにぶつけた腕と足が痛いふりをして、拳銃を隠して台所に行った。

台所で、K Yに

「どうでした？」

「ありました。拳銃です」

と言って、I Yはジャケットから拳銃を取り出した。

「では、今度は私が説得する番ね」

「よろしくお願いいたします…准尉、拳銃を確保しました」

と、左耳の補聴器に語り掛けると、（よくやった、I Y）とH Gの返事が返ってきた。

K Yはベッドで着替えているK Eに洗った飴をK Eの口に入れて

「ほら、ちゃんと舐め切らないと駄目よ！」

と言って、K Eの背中を叩くと、K Eの横に座り

「あのね…私ね、ちょっと困っている事があって…ねえ、愚痴聞いてくれる？」

「また…いいけど」

それを聞いたIY（「また」？この人そんなに弟に愚痴ってんの？）と思った。

「うん…実はね、先日私の面度見てる娘達のコンサートを妨害しようと脅迫状が届いたの…」

「…そつ、そうなんだ…」

IYは（あ、明らかに動揺してる…やはり、この人？）と思った。

「まだ警察に話していないから内緒ね…で、姉さんしんどくて…またお酒の量が増えちゃいそう…」

「姉さん、それで体壊して芸能界引退したんだから、やめてくれよ！」

それを聞いたHGは、（…そうだったの？）と、KYが芸能界を引退した真実を聞いて驚いた。

「それでね…いま見てる娘達、皆頑張ってアイドルやってるけど、あんな脅迫状が来ると姉さん辛いわ。どうしたらいいと思う？」

「だって、確か姉さん前に『自分が面倒見ている娘達が言う事を聞かないので疲れてダルイ』って言ってたよね」

「それは…そうだけど、私もあの娘達の頃は、もっと言う事きかなかったし…（苦笑）、私から見たら可愛いのよ…本当の娘みたいに全部ね…疲れるのはホントだけど、それだけ育て甲斐があつて、楽しいわ！疲れているのは歳のせいと昔崩した体調のせいもあるのよ」

「だから、俺は姉さんが少しでも楽になる様に…」
と言って、KEは急に口を噤んだ。

「私を楽にするの？どうやって」

KYがKEに対して責めるような口調で言うと、

「…ゴメンナサイ…その脅迫状書いたのは俺です…」

とKEが白状した。

「何ですって!」

とKYは叫んだ。それを聞いたHG(サスペンスドラマの女優やった頃のノリになってきたなあ)と思った。

「あなたなの?あの娘達のコンサートを辞めさせる様に書いている脅迫状送ったの?」

「…そうです、ゴメンナサイ姉さん!…それと、この拳銃で…」

と言って、KEはベッドの下を手で探るが拳銃が見つからない。慌ててベッドの下を覗きこむと

「なっ、ない…拳銃が…」

「どうしたの?」

KYが白々しく訊ねると、

「ここに拳銃があったんだ…それが無くなっちゃって…」

「あら、そう」

と冷ややかに言うと、

「確かにあったんだ、先日道に倒れていた人のトランクから拳銃の入ったケースが出ていて、そこから持って来たんだ」

と真剣な表情でKEはKYに訴えた。それを聞いて、KYは

「…これでいいかしら、IYさん」

「はい、ありがとうございます」

と言って、台所から拳銃を持ったIYが現れる。それを見たKEは驚き、そして観念した。

「そう言う事ね、あなたの私に対する気持ちはありがたいけど、こういうことは辞めて頂戴!」

「はい」

「あなた、この拳銃を持って警察行きなさい…拾得物としてちゃんと届けるのよ!」

「姉さん…それって」

「ウチの社長は、まだあんたの脅迫状は警察に届けていないの。だからあんたは、その拳銃を道端で拾って警察に届けようとしたけど、流感に感染して熱が出たので、届けられませんでしたと言っって、警察署に行けばいいの!姉さん付いて行ってあげるから…いい?」

「はい、ありがとう姉さん」

「これで、一件落着ね…じゃ警察署に行こうか」

と言っって、KYは立ち上がった。

HGはIYのイヤホンから一部始終を聞いて(まだ、女優してやっていけるんじゃない?)と思っった。

港町警察署(KEのアパートの所轄は港町警察署です。作者)にKYに伴われたKEが拳銃を紙袋に入れて中に入っって行っった。そこにはIYもついで行っった。KEはKYの言っとおりに話をして拳銃は拾得物として押収された。

警察署から出てきたKYとKEをHGは白山亭に招待した。

改めて白山亭オリジナルコーヒーを飲みながら、

「この度は、弟の為に…ありがとうございます」

と言っって、KYとKEは頭を下げた。

「いや、KYさんのあの咄嗟の演技、外から聞いていましたが恐れ入りました」

「アラ…ヤダ、聞いていたの?」

「はい、部屋の中で見られなかったのが残念で…まだまだ女優としてやっていけるのでは?」

「ありがとうございます(笑)」

バーカウンターにいるT Tのこめかみがピクピクする。

● 借刀殺人

K Yと弟のK Eが帰った後、H GはH Yに電話して

「依頼は解決した。これからM K社長に連絡するから、K Yさんがそちらに戻り次第、帰る用意をしてくれ」

『はい、了解しました。結果を後で聞かせてください』

「うむ」

H Gはスマートフォンの通話を切ると、E Yを呼び

「今回は、かなり特殊なケースだが、実際に犯行を未然に防ぐ事ができた。でも、いつもこうなるとは限らない。今回の請求書は提示した見積もりをかなり下回る。特に犯人が脅迫犯から愉快犯になったので、成功報酬はほぼゼロになる」

「未然防げたのはいい事だと思います」

「うん、俺もそう思う。エージェント達の仕事は自警団の仕事とか、射撃インストラクターくらいでいいと思うが、それだけでは食べていけない」

「自分達軍隊と違って不安定なんですね」

「そうだよ、だから、この店とかガンスミスで糊口を凌いでいる」

∴ H Gの方便です。実際には、エージェント部門の収入がトップです。作者

「…」

「君ももうじき、実習期間が終わる…なにか収穫があったかね？」

「いまH G社長がおっしゃった、エージェント稼業は不安定と言う事と、犯罪を未然に防ぐための迅速且つ柔軟な対応…その為の普段からのコミュニケーションと連携…あと、H G

社長とエージェント達との信頼関係でしょうか…HG社長の信頼の元に何かあったらエージェント達が一丸になって対応する」

「それで、なにかマニュアル化できそうなモノがあったかね？」

「…そうですね、HG社長がさっきの盗まれた拳銃を所持している容疑者についての対処方でその場の話し合いで検証と対策を詰める方法については、ブレインストーミングを応用していると考えてマニュアル化して、部隊内で作戦前の意識合わせとか作戦中に発生した不測の事態に対処する時に使えると思います…訓練自体はマニュアルが既にあると考えられますが、それは我が海兵隊のマニュアルに近いモノを感じました。あとは、マニュアル化できませんね…普段のお互いの信頼とHG社長への絶大な信頼関係はマニュアル化できませんし、軍では使えません」

「成程…当社（碓屋）を外から分析してくれてありがとう…中に居ると気づかない事が多くてね」

「…えっ？それって…まさか…」

「逆に、ウチの強みの洗い出しと各自の評価基準を作るのに役立たせていただきました」

「…ぎゃふん」

この後、HGは請求書を作成してMK社長に渡すと、

「あらゝ、今回は随分安くあがったわねゝ」

「人手はかかりましたが、短期間でしたので…それに愉快犯と分かり、言い聞かせましたので、成功報酬も減額して、危険手当は入っていません」

「そゝなの、これで払いましょ！少しこちらから謝礼も出すわ。またヨロシクね」

その帰りにHGはHY達を迎えに行き、帰っていたKYにちやつかりサインを貰った。

その後、E Yの実習期間が終わるまで、毎晩母屋の食堂でE Yの海兵隊の作戦行動に対する講義がH Gと息子娘達に対して行われ、活発な意見交換が行われた。

そして：E Yの実習期間が終わったので、Y海軍基地のE M大尉が迎えに来た。

●エピローグ、自分も弟子にしてください！

「この度は、私の無理をきいていただき、誠にありがとうございました」
と言って、E M大尉はH Gに頭を下げた。

「いえ、こちらこそいい勉強させていただきました」

とH Gは笑って応じた。E M大尉は、

「E Y伍長！」

「ハイ！」

「ここで、学んだことを報告しろ！」

「ハッ、碇屋さんの結束力の強さは、その構築に長い時間がかかり、そう簡単には出来ない
と思いました。一部例外も居ますが、H G社長に対する信頼がそれを補っていますし、周囲
のサポートがあります。これは、軍隊では難しいとともに、エージェントの任務として欠か
せないものと思われれます」

「成程」

「従って、一部を除きマニュアル化は不可能でした。逆にマニュアル化できたモノは軍に持
ち帰り生かすことで、部隊が強くなると確信しています。また、今回は必ずしもマニュアル
化が必要ではない事も学びました。以上」

「よろしい」

「ハッ、あともう一点」

「なんだ」

「自分は今回の実習を通して、H G社長の教育者として面を見ることができました。このエージェント達はH G社長の事を「准尉」と呼んでいます。これは、H G社長が自分達の尊敬する上官であり、またここでは父親として敬愛されているからです。ですので、H G社長…いや「准尉」！自分を弟子にしてください…」

と言われて、H GとE M大尉は困惑した。(またかよ…)と困り顔のH Gに

「准尉…いつもの「めんどくせー」と言わないで下さいね…人が増えたら、食費とか光熱費とか食事の当番割や風呂やトイレの清掃の当番割とか色々面倒が増えますからね…」
と言って、H Yが薄笑いをするが笑っていない目をしてH Gの肩をポンッと叩く。

…結局、E Yの弟子入りの件は、なくなり、E M大尉と共にY海軍基地に帰りましたが、I YやH Yの事もありますから、押しかけてくるかもしれませんね。作者

「巻き込まれ親父の教育 Ⅱ完Ⅱ」